山梨市文化財調査報告書　第21集

東田遺跡

－畑地帯総合整備事業岩手地区農道５号整備に伴う発掘調査報告書－

２０１４．６

山梨県峡東農務事務所
山梨市教育委員会
昭和測量株式会社

序

本書は畑地帯総合整備事業岩手地区農道５号の整備に伴って行われた東田遺跡発掘調査の報告書です。調査地は大正年間以降に廃寺になったと思われる円福寺境内の一角であり、岩手信景の館跡と伝わる金光寺に隣接しています。調査は幅２ｍ、長さ50ｍの範囲で行われました。

調査では館跡や円福寺に関するような遺構・遺物は発見されませんでしたが、堆積している多量の礫や出土した遺物は、遺跡周辺の近世以前の様子を推測する手掛かりとなりそうです。

最後になりますが、調査を担当していただいた昭和測量株式会社の皆様をはじめ関係各位に心から感謝申し上げ、序といたします。

平成26年６月

山梨市教育委員会
教育長　丸山森人

例　言

1. 本報告書は、山梨県山梨市東 647-2 ほかに所在する東田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は山梨県峡東農務事務所による畑地帯総合整備事業岩手地区農道5号整備に先立って実施されたもので、峡東農務事務所と山梨市教育委員会および昭和測量株式会社の間で三者協定を締結し、山梨市教育委員会の指導・監督・助言のもと昭和測量株式会社が発掘調査および整理作業を行った。
3. 発掘調査は平成 26 年3月 19 日～4月 15 日にかけて実施し、整理・報告書刊行業務は平成 26 年4月 16 日～6月 30 日まで実施した。
4. 発掘調査および本報告書の執筆と編集は小谷亮二（昭和測量株式会社）が担当したが、第1章　調査に至る経緯は雨宮弘聡（山梨市教育委員会）が担当した。遺物の実測は、石製品を高野高潔（昭和測量株式会社）が行い、それ以外は、斎藤里美、小澤美幸が行った。遺物写真は小谷が撮影を行った。
5. 本報告書で使用地図は、国土地理院発行の「御岳昇仙峡」（1:25000）、国土地理院の基盤地図情報を使用した。
6. 遺跡における X、Y 座標は世界測地系座標を使用している。
7. 発掘調査および遺物の整理においては次の方々に御指導と御協力を賜った。感謝の意を表したい。（順不動、敬称略）

   坂本美夫　佐野隆　宮里学　久保田健太郎
8. 本調査における図面・写真・遺物はすべて山梨市教育委員会で保管している。

凡　例

1. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各挿図中に記載した。
2. 写真図版の縮尺は任意である。
3. 水糸レベルの数字は海抜高を示し、単位はメートル (m) である。
4. 土層断面、遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖 1990 版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づいた。

本文目次

第1章　調査に至る経緯 …… 1
第2章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 1
1. 遺跡の立地 …… 1
2. 歴史的環境 …… 1
第3章　調査の方法 …… 10
第4章　調査の成果 …… 10
1．基本層序 …… 10
2．検出状況 …… 11
第5章　出土した遺物 …… 11
第6章　まとめ …… 12
参考文献 …… 26

挿図目次

第1図　遺跡位置図 …… 2
第2図　地質図と遺跡分布図 …… 4
第3図　周辺の遺跡分布図 …… 5
第4図　土層断面図 …… 9
第5図　調査区全体図上層 …… 14
第6図　調査区全体図下層 …… 15
第7図　遺物出土分布図 …… 16
第8図　遺物出土断面図 …… 17
第9図　遺物実測図（1） …… 18
第10図　遺物実測図（2） …… 19
第11図　遺物実測図（3） …… 20
第12図　遺物実測図（4） …… 21
第13図　遺物実測図（5） …… 22
第14図　遺物実測図（6） …… 23

挿表目次

表1　地質区分と周辺の遺跡地名表（1） …… 6
表2　地質区分と周辺の遺跡地名表（2） …… 7
表3　地質区分と周辺の遺跡地名表（3） …… 8
表4　遺物観察表（1） …… 24
表5　遺物観察表（2） …… 25
表6　遺物観察表（金属製品）（3） …… 26
表7　遺物観察表（石製品）（4） …… 26

写真図版目次

写真図版1
1．調査区石垣（北から）
2．調査区石垣（南から）
3．礫検出状況（遺物包含層除去後）（南から）
4．礫検出状況（上層）（南から）
5．礫検出状況（北側上層）（北から）
写真図版2
6．調査区最北部西・北壁土層断面（南東から）
7．サブトレンチ1北壁土層断面
8．サブトレンチ1東壁土層断面
9．サブトレンチ3西壁土層断面
10. サブトレンチ3東壁土層断面
11. サブトレンチ4西壁土層断面
12. サブトレンチ4東壁土層断面
13. サブトレンチ4北壁土層断面
写真図版3
14. サブトレンチ7北壁土層断面
15. サブトレンチ7西壁土層断面
16. サブトレンチ9西壁土層断面
17. サブトレンチ9北壁土層断面
18. サブトレンチ12東壁土層断面
19. サブトレンチ12南壁土層断面
20. 調査区最南側東壁土層断面
21. 調査区最南側南壁土層断面
写真図版4
22. 礫検出状況（下層）
写真図版5
23. サブトレンチ1東壁　縄文土器出土状況
24. 陶磁器出土状況
25. 陶器出土状況
26. 煙管出土状況
27. すり鉢出土状況
28. 砥石出土状況
29. 石臼出土状況
30. 石臼出土状況（断面）
写真図版6
31. 石臼と加工礫出土状況（西から）
32. 石臼と加工礫出土状況（断面）
33. 石造物片（右上）と加工礫出土状況（北から）
34. 石造物片と加工礫出土状況（断面）
35. 石造物片と砥石出土状況（断面）
36. 測量風景
37. 作業風景
38. 作業風景
写真図版7　出土遺物（1）
写真図版8　出土遺物（2）
写真図版9　出土遺物（3）
写真図版10　出土遺物（4）

第1章 調査に至る経緯

山梨県峡東農務事務所では平成23年度から28年度にかけて岩手地区で畑地帯総合整備事業を行う計画であり、今回調査対象となった農道5号の整備工事もその一環として行われた。

農道5号周辺は、山梨県埋蔵文化財センターが行った平成23年度以降の土木工事事業についての照会において、東田遺跡に該当しており試掘が必要との判断がされていた。このため平成25年8月12日に埋蔵文化財発掘の通知が峡東農務事務所より山梨市教育委員会に提出され、11月20日から12月4日にかけ山梨市教育委員会による試掘調査が行われた。試掘調査の結果、遺構は確認されなかったが、調査地周辺に方形に近い地割が見られ、周辺に館に関する遺構が存在する可能性があったことと、近世以前の陶磁器片が出土していることから、今回の発掘対象地である100㎡について遺跡の保護について峡東農務事務所と山梨市教育委員会で協議を行った結果、記録保存調査を行うこととなった。

業務の都合により山梨市教育委員会による調査が困難であったため、峡東農務事務所は昭和測量株式会社に調査を委託、平成26年2月18日に山梨市教育委員会を含めた三者協定を結び山梨市教育委員会が調査の監理をすることとし、同日文化財保護法92条の届出が昭和測量株式会社から山梨市教育委員会に提出され、3月19日から調査に着手する運びとなった。

第2章　遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

山梨県山梨市は甲府盆地東部に位置する。秩父山地から流下する笛吹川と大菩薩山地から流下する重川によって形成された扇状地とその他の河川の扇状地によって形成されている。市の南西から北西には甲府北部山地の主脈の一部帯那山とその主脈から派生する稜線が走り行政境を形成している。

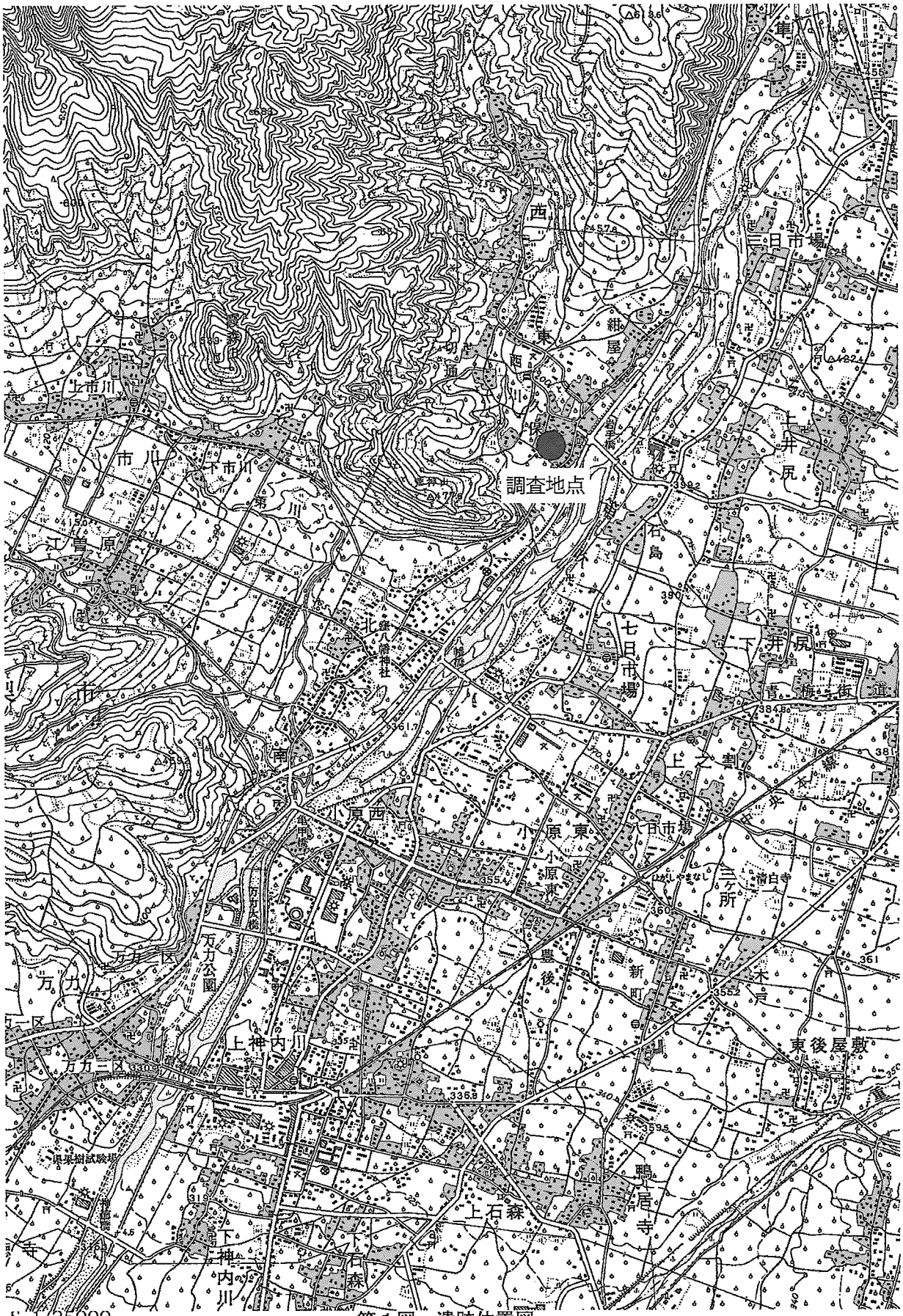
今回調査を行った東田遺跡は、標高393.0 m（調査前の現況面）に位置し、地質は低位段丘堆積物で構成されている。この低位段丘堆積物は、笛吹川右岸では、市川、南、万力二、三区、正徳寺付近に広がっている。対して左岸は、笛吹川に沿って中位段丘堆積物が広がり、低位段丘堆積物は重川の流域と塩ノ山の南側で中位段丘堆積物に挟まれるように広がっている。東田遺跡の西側には広瀬花崗閃緑岩（カミングトン閃石含有緑色角閃石黒雲母トーナル岩―花崗閃緑岩）を岩相とする地質区分、東田遺跡の北側は中位段丘堆積物（礫・砂・ローム及び軽石）さらに高位段丘堆積物（礫・砂・ローム及び軽石）が続いている。今回の調査では礫層が調査区全面を覆っており、検出された礫の性格や出土した遺物が、周辺の地形や地質構造と周辺に分布する遺跡の性格と密接に関連していると考えたため、地質構造と遺跡分布図を合成した遺跡分布図と周辺の遺跡分布図の2種類の図面を示した。

2. 歴史的環境

調査区の位置する岩手地区は武田信昌の子縄美が入部して姓とした場所で、そのあとを継いだ能登守信盛は永禄5年（1562）に信盛院を創建して菩提寺とした。調査区に隣接する曹洞宗金光寺は甲斐国社記寺記によると信盛の子の信景の開基であり、この一帯は天正10年（1582）の武田氏滅亡までの間岩手氏の強い支配下にあったと推測される。

東田遺跡の位置する笛吹川右岸上は、縄文・平安・中世の遺跡が多く分布している。

今回の調査区では礫に混じって縄文土器が出土している。山梨市では53箇所の縄文時代の遺跡が確


調査地点
七日市場
三日市場
八日市場
上之割
下井尻
上井尻
東後屋敷
上石森
下石森
上神内川
下神内川
万力公園
万力一区
万力二区
小原西
小原東
北八幡神社
県果樹試験場
S=1/25000

第１図　遺跡位置図

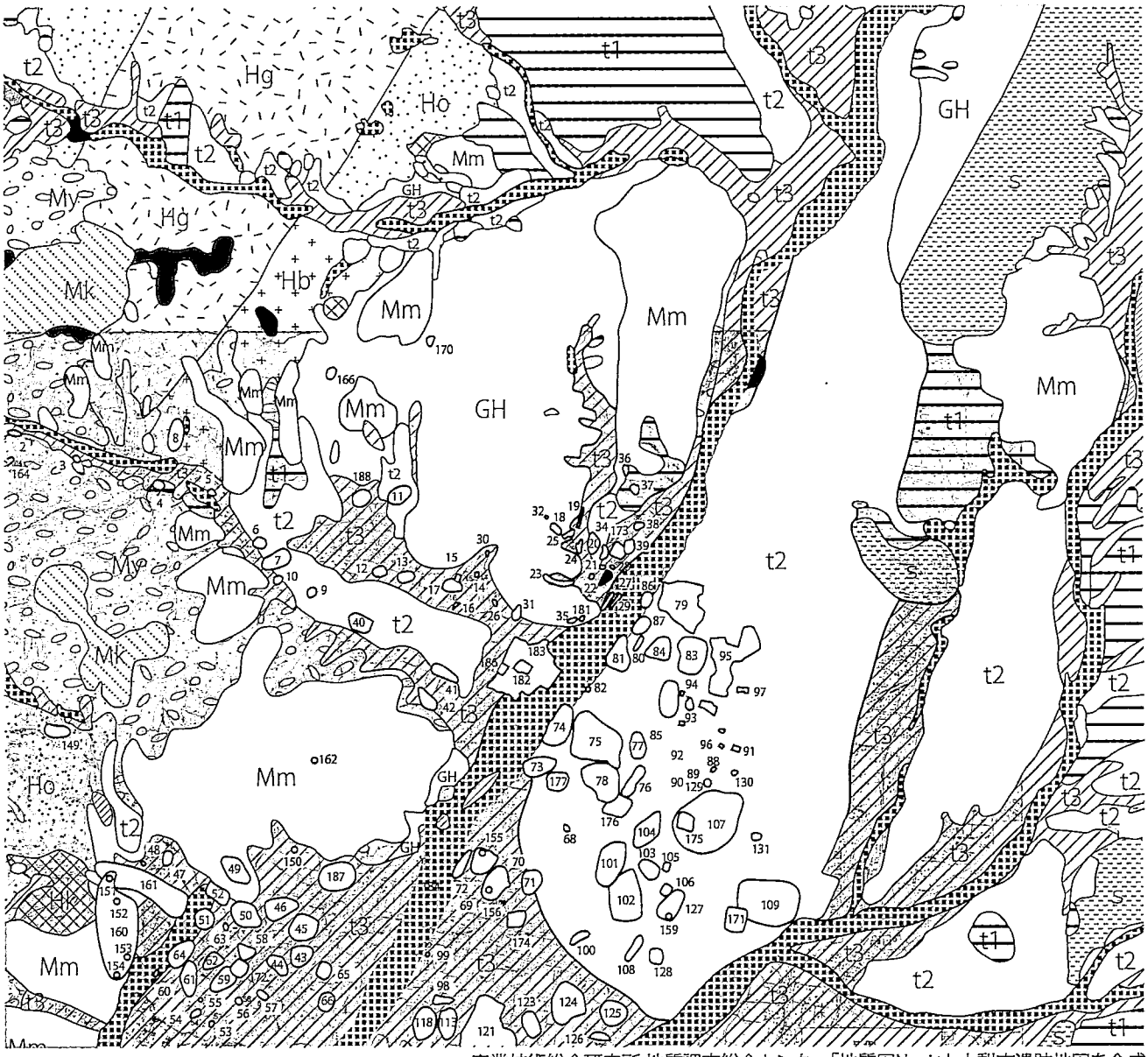
認されており東田遺跡周辺でも、調査区から西 50 mの地点に **21 村西遺跡**がある。中期中頃の井戸尻式土器や中期末の曽利式土器が出土しており、その南西には散布地として **22 丸山遺跡**が位置している。調査区の北西に位置する **38 添田遺跡**は中期末の曽利式終末期の土器や戦前に磨石が古屋善博氏により採集されている。

市川に所在する **13 植田遺跡**は、平成8年（1996）に調査が行われた。集石土坑2基と曽利式Ⅰ～Ⅱ段階の古手の要素を持つ土器が出土している。同じく市川の **188 泉林遺跡**は縄文時代中期中頃の藤内式から井戸尻式の土器が出土している。従来中期後半が主流であり、扇状地平坦面に位置していたのに対して、中期中葉の土器が出土した事、山地緩斜面上に位置している事が特筆される。

笛吹川左岸の下石森に所在する **121 屋敷添遺跡**は、平成 10 年の分布調査では縄文時代中期中葉の藤内式土器と中期末の曽利式終末期の土器、土製円盤が、平成 13 年の試掘調査では後期の称名寺Ⅰ式の土器片が出土している。遺構としては、昭和 47 年調査の調査カードには敷石住居跡が発見されたという記述がある。縄文時代後期初頭の土器としては市域では唯一の資料であり、藤内式土器も市域では希少である。縄文時代の中でも複数の時期にまたがる遺跡と言える。

平安時代の遺跡としては、**181 荒神山窯跡**が調査区南方に位置する荒神山の東端傾斜面で確認された。地質区分は広瀬花崗閃緑岩上に位置する。県内では少ない平安時代の土師器生産遺跡のひとつである。構造窯の遺構は、甲斐型土器の生産方法とは異なる構造を示している。また、この窯で焼かれる柱状高台坏の出現も土器編年上の画期と考えられる。**40 江曽原遺跡**は笛吹川の支流の兄川と弟川に挟まれた扇状地の中央部に位置する。遺跡周辺は条理型地割の残る畑地帯である。昭和 62 年発刊の報告書では、調査区域を南北に分断するような東西方向の大溝が検出された。その溝の北側では溝と井戸、南側では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝が検出されている。遺物は、「王」の墨書土器が出土している。**187 足原田遺跡**は笛吹川によって形成された扇状地の西縁に位置する。本調査の結果、平安時代末の住居跡6軒と古墳時代前期の土器捨て場が確認された。平安時代の住居跡から出土した土器は 11 世紀後半から 12 世紀を主体にしており荒神山窯跡との関連も注目される。**75 日下部遺跡**は笛吹川左岸の沖積地に位置する。5回調査が行われ住居跡、倉庫跡、溝跡が検出された。遺物は、9世紀後半から 10 世紀代を主体し、土師器、須恵器、灰釉陶器、金属製品、石製品が出土している。**118 杉ノ木遺跡**は笛吹川左岸の扇状地の南辺部分に位置する。住居跡、溝、土坑、石列が検出された。墨書土器も出土しており9世紀後半から 10 世紀前半に位置付けられる。

中・近世の遺跡としては、調査区の北西、岩手橋の西側に **173 上野氏屋敷**が位置する。複郭構造をもち 180 m四方程度の屋敷規模が推定される。建築時期は 17 世紀前期に遡ると推定される。屋敷の四方を取り巻いている石塁は落とし積の技法から近世後半の構築と判断される。



S=1/50000

産業技術総合研究所 地質調査総合センター「地質図Navi」と山梨市遺跡地図を合成

凡例

- t3 低位段丘堆積物
- t2 中位段丘堆積物
- t1 高位段丘堆積物
- a 沖積層
- GH 広瀬花崗閃緑岩
- Hb 馬場溶結凝灰岩
- Ho 大平溶結凝灰岩
- Mm 窪平泥流堆積物
- My 山口軽石凝灰岩
- S 四万十累層群
- Mk 片山溶岩
- Hk 角閃石輝石安山岩
- Mt 紫蘇輝石普通輝石安山岩 スコリア凝灰岩（一部溶結）
- Hg カミングトン閃石紫蘇輝石普通輝石含有角閃石黒雲母花崗閃緑岩

産業技術総合研究所地質調査総合センター (編) (2012) 20万分の1日本シームレス地質図データベース(2012年7月3日版). 産業技術総合研究所研究情報公開データベース DB084, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

第２図　地質図と遺跡分布図

第３図　周辺の遺跡分布図

表１　地質区分と周辺の遺跡地名表（１）

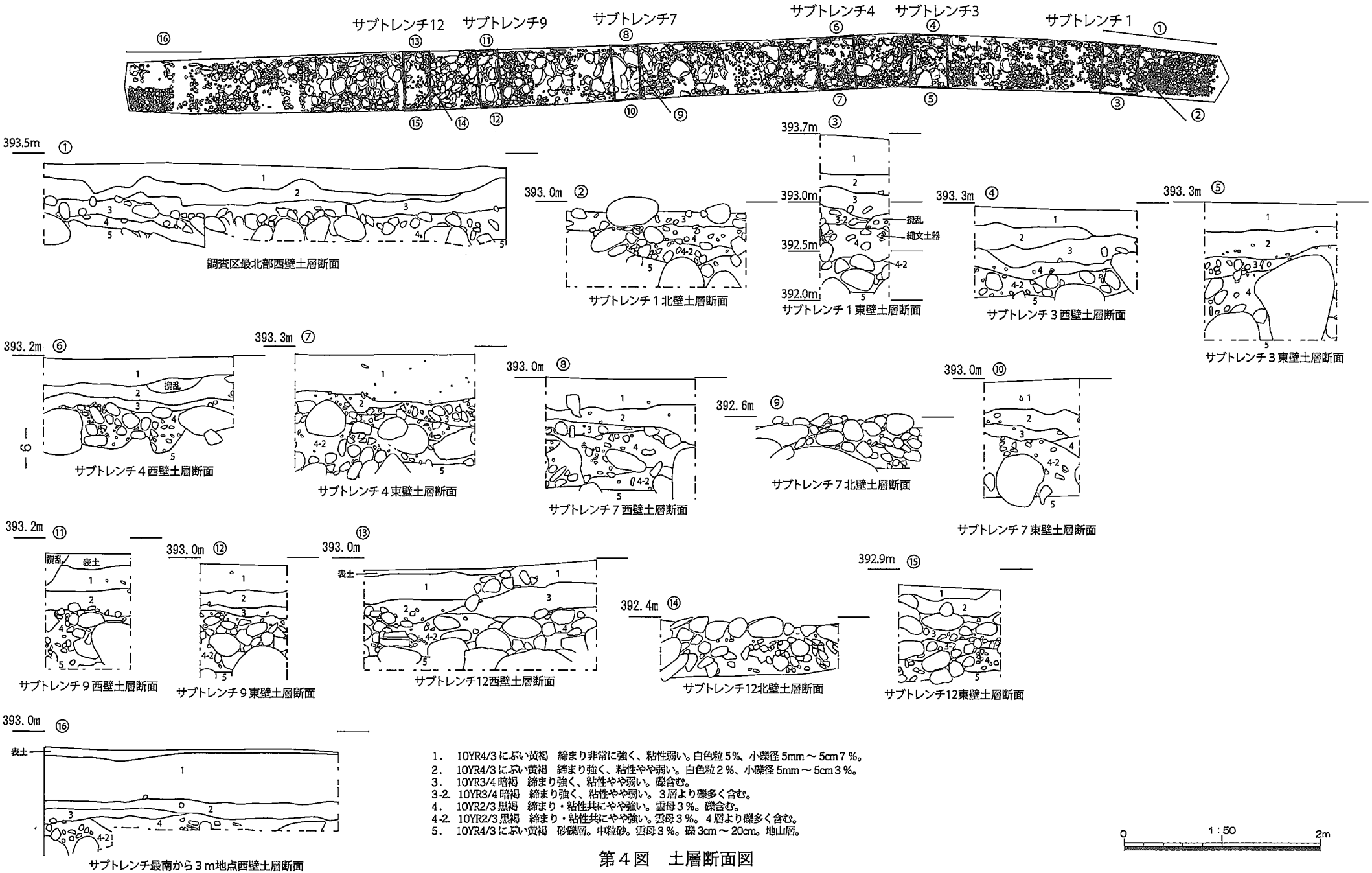
地質区分			遺跡 NO.	遺跡名	種別	時代
t3	低位段丘堆積物	礫及び砂	1	東田遺跡	社寺跡	中世・近世
			2	和田遺跡	散布地	縄文・平安
			3	源田窪遺跡	散布地	中世
			5	形山遺跡	散布地	縄文・中世
			10	大工南遺跡	散布地	縄文
			12	市川西遺跡	散布地	縄文
			13	植田遺跡	散布地	縄文
			14	於北南遺跡	散布地	平安
			15	神明前遺跡	散布地	平安
			16	犬塚遺跡	散布地	平安
			17	市川東遺跡	散布地	縄文
			19	堤下遺跡	散布地	平安
			21	村西遺跡	散布地	縄文
			22	丸山遺跡	散布地	縄文
			23	大久保遺跡	散布地	縄文・平安
			24	切通南遺跡	散布地	縄文・平安
			26	桶詰裏遺跡	散布地	平安・中世
			28	久保西遺跡	散布地	平安
			30	於北北遺跡	溜池跡	中世・近世
			38	添田遺跡	散布地	縄文
			39	久保田遺跡	散布地	縄文
			42	兄川河床遺跡	その他	旧石器
			43	間之田東遺跡	散布地	平安
			44	天神前遺跡	散布地	縄文・平安・中世
			45	間之田西遺跡	散布地	古墳・平安
			46	原ノ前遺跡	散布地	奈良
			47	長田遺跡	散布地	縄文
			48	鷹田遺跡	散布地	中世・平安
			50	延命寺遺跡	集落跡	弥生・古墳・平安
			53	欠之下遺跡	散布地	中世
			54	花桜遺跡	散布地	平安・中世
			55	落合市道遺跡	散布地	平安
			56	正徳寺前田遺跡	散布地	平安
			57	林際遺跡	散布地	平安
			58	屋敷遺跡	散布地	平安・中世
			59	堀之内遺跡	散布地	平安
			61	半座池遺跡	散布地	古墳・平安・近世
			62	田屋之前遺跡	散布地	平安
			63	三枚地遺跡	散布地	平安・中世
			65	三宮寺遺跡	散布地	平安・中世
			66	九ツ塚遺跡	散布地	平安・中世
			69	平塚遺跡	散布地	平安
			70	塚越遺跡	散布地	古墳・中世
			72	日下部病院前遺跡	散布地	古墳
			98	前田遺跡	散布地	平安
			99	宮ノ上遺跡	散布地	平安
			113	宗高北遺跡	散布地	平安
			118	杉ノ木遺跡	集落跡	古墳・平安
			121	屋敷添遺跡	散布地	縄文・平安・中世
			123	宮ノ前遺跡	散布地	平安

表２　地質区分と周辺の遺跡地名表（２）

地質区分			遺跡NO.	遺跡名	種別	時代
t3	低位段丘堆積物	礫及び砂	124	上黒木遺跡	散布地	奈良・平安・中世
			125	金山林遺跡	散布地	古墳・平安
			126	堀ノ内遺跡	散布地	縄文・弥生・平安
			150	長源寺前古墳	古墳	古墳
			155	平塚古墳	古墳	古墳
			156	稲荷塚古墳	古墳	古墳
			172	落合館跡	城館跡	中世
			174	城伊庵屋敷跡	城館跡	中世
			186	清水陣屋跡	陣屋跡	近世
			187	足原田遺跡	集落跡	古墳・平安
			188	泉林遺跡	散布地	縄文
t2	中位段丘堆積物	礫・砂・ローム及び軽石	6	小揚遺跡	散布地	平安
			7	大工北遺跡	散布地	古墳・平安
			9	芦原遺跡	散布地	平安
			11	市川北遺跡	散布地	縄文
			20	藤の木道下遺跡	散布地	縄文・平安
			40	江曽原遺跡	集落跡	縄文・古墳・平安
			41	上コブケ遺跡	集落跡	縄文・古墳・平安
			68	寺の下遺跡	散布地	縄文
			73	八王子遺跡	散布地	縄文
			75	日下部遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
			76	西久保遺跡	散布地	縄文・平安
			77	下ノ原遺跡	散布地	縄文
			78	大堀遺跡	散布地	奈良・平安
			79	宮ノ前（七日子）遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
			80	西ノ窪遺跡	散布地	縄文・平安
			81	天神原南遺跡	散布地	縄文・平安
			82	権現窪経塚	経塚	中世・近世
			83	十王堂遺跡	散布地	奈良・平安
			84	中沢遺跡	散布地	古墳・平安
			85	神明遺跡	散布地	奈良・平安
			87	天神原北遺跡	散布地	縄文・平安
			88	相畑北遺跡	散布地	古墳
			89	相畑南遺跡	散布地	中世
			90	唐土遺跡	散布地	古墳・中世
			91	飛沢遺跡	散布地	中世・近世
			92	狐塚遺跡	散布地	平安
			93	御屋敷南遺跡	散布地	縄文・平安
			94	御屋敷北遺跡	散布地	平安
			95	阿弥陀堂遺跡	散布地	縄文・古墳・奈良・平安
			96	天神原遺跡	散布地	平安
			97	宮ノ西遺跡	散布地	古墳・中世
			100	上手原遺跡	散布地	縄文
			101	浅間遺跡	散布地	平安・中世
			102	吉原遺跡	散布地	平安
			103	大橋遺跡	散布地	平安・中世
			104	樋口遺跡	散布地	古墳・平安・中世
			105	河野氏屋敷	城館跡	中世・近世
			106	新町東遺跡	散布地	縄文
			107	三ケ所遺跡	散布地	縄文・平安・中世
			108	鍛冶屋久弥遺跡	散布地	古墳

表３　地質区分と周辺の遺跡地名表（３）

地質区分			遺跡 NO.	遺跡名	種別	時代
t2	中位段丘堆積物	礫・砂・ローム及び軽石	109	東後屋敷遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安・中世
			127	原遺跡	散布地	古墳
			128	榎木遺跡	散布地	古墳
			129	上之割八王子遺跡	散布地	平安
			130	三ケ所梨木遺跡	散布地	平安
			131	梨木遺跡	散布地	平安
			151	観音塚古墳	古墳	古墳
			152	山寺古墳	古墳	古墳
			159	ふじ塚古墳	古墳	古墳
			171	武田金吾屋敷跡	城館跡	中世
			175	連方屋敷	城館跡	中世
			176	安田義定館跡	城館跡	中世
			177	安田義定館跡	城館跡	中世
t1	高位段丘堆積物	礫・砂・ローム及び軽石	4	馳平遺跡	散布地	縄文
			36	萱刈遺跡	散布地	縄文
			37	堂屋敷遺跡	散布地	縄文・平安
a	沖積層	礫・砂及び泥；一部崩堆積物を含む	27	中島遺跡	散布地	縄文・平安
			29	下河原遺跡	堤防遺跡	中世・近世
			51	千原田遺跡	集落跡	古墳・平安
			60	小金田遺跡	散布地	縄文
			64	小武家遺跡	散布地	弥生・古墳・平安・中世
			86	下弥勒遺跡	散布地	縄文・平安
			184	雁行堤	堤防遺跡	近世
GH	広瀬花崗閃緑岩	カミングトン閃石含有緑色角閃石黒雲母トーナル岩ー花崗閃緑岩	18	切通西遺跡	散布地	平安
			25	切通東遺跡	散布地	平安
			31	西片山遺跡	散布地	中世・近世
			32	切通北遺跡	横穴遺構	中世・近世
			35	中下西遺跡	散布地	平安
			166	丸山の烽火台跡	城館跡	中世
			181	荒神山窯跡	窯跡	平安
Hb	馬場溶結凝灰岩	黒雲母角閃石流紋岩	8	堂平遺跡	散布地	平安
Ho	大平溶結凝灰岩	角閃石普通輝石デイサイト（一部黒雲母を含む）	149	永昌院西山遺跡	散布地	平安
Mm	窪平泥流堆積物	火山岩塊・火山礫・火山灰・礫・砂及び泥	49	金桜遺跡	散布地	縄文・平安
			153	天神塚古墳	古墳	古墳
			154	牧洞寺古墳	古墳	古墳
			162	富士塚	塚	近世
My	山口軽石凝灰岩	角閃石含有普通輝石紫蘇輝石安山岩軽石凝灰岩及び凝灰角礫岩	164	仏沢城跡	城館跡	中世
Mm,t2,t3			160	岩下古墳群	古墳群	古墳
t2,a			74	立石遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安
t2,t3			161	山根古墳群	古墳群	古墳
t3,a			182	窪八幡神社	神社	中世
			183	窪八幡神社社家坊中群	社寺跡	縄文・中世・近世



1. 10YR4/3 にぶい黄褐　締まり非常に強く、粘性弱い。白色粒5%、小礫径 5mm～5cm7%。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐　締まり強く、粘性やや弱い。白色粒2%、小礫径 5mm～5cm3%。
3. 10YR3/4 暗褐　締まり強く、粘性やや弱い。礫含む。
3-2. 10YR3/4 暗褐　締まり強く、粘性やや弱い。3層より礫多く含む。
4. 10YR2/3 黒褐　締まり・粘性共にやや強い。雲母3%。礫含む。
4-2. 10YR2/3 黒褐　締まり・粘性共にやや強い。雲母3%。4層より礫多く含む。
5. 10YR4/3 にぶい黄褐　砂礫層。中粒砂。雲母3%。礫 3cm～20cm。地山層。

第4図　土層断面図

第3章　調査の方法

重機による表土掘削後、人力による遺物包含層掘削および礫の検出作業を行った。礫層に関しては、人力では移動できない礫が多く検出されたため、下層の調査は、人力による礫の移動が可能で尚且つ下層の地山まで掘削出来ると思われる位置にサブトレンチを設定し、可能な限り地山（砂層）まで掘削を行った。

礫層の平面の図化に関しては、ポール撮影を行い、その他、土層断面、出土状況図等に関しても必要に応じて写真測量を行った。写真補正はCUBIC社製遺構実測支援ソフト電子平板「遺構くん」によって行った。補正した写真はadobe社製「illustratorCS6」によりトレースを行った。

出土した遺物は、表土、遺物包含層毎に一括で取り上げた。礫層はSXとし、さらにグリッドに替えるものとして任意の位置でSX北、SX中、SX南とし一括で取り上げた。残存状況の良い遺物や金属製品、石製品は上記トータルステーションにより計測し取り上げを行った。

使用システム

トータルステーション　TOPCON SOKIA CX-105
電子平板　Panasonic TOGHBOOK CF-19
遺構実測支援ソフト　「遺構くん」電子平板対応

第4章　調査の成果

1．基本層序

本遺跡は笛吹川右岸上に位置し、低位段丘堆積物（礫・砂）に区分されている。上層に関しては、調査区東側を南西－北東方向に走る石垣構築時の客土や調査区西側に広がる畑の耕作時に天地返しを受けていると思われる。土層断面の確認は、人力で移動不可能な礫を含め全体が覆われていたため、任意にサブトレンチを設定し、人力で移動可能な礫に関しては除去し地山までの掘削を行った。礫に関しては、礫間に混入している遺物を見ると、自然現象による低位段丘堆積物（礫）の移動と捉えて良いと思われるが、その後の人力による移動も受けていると考えられる。

ここではサブトレンチをピックアップしてその土層断面図を示す。

基本層序は以下の通りである。

1．10YR4/3 にぶい黄褐　締まり非常に強く、粘性弱い。白色粒5％、小礫径 5mm ～ 5cm 7％。
2．10YR4/3 にぶい黄褐　締まり強く、粘性やや弱い。白色粒2％、小礫径 5mm ～ 5cm 3％。
3．10YR3/4 暗褐　締まり強く、粘性やや弱い。礫含む。。
3-2．10YR3/4 暗褐　締まり強く、粘性やや弱い。3層より礫多く含む。
4．10YR2/3 黒褐　締まり・粘性共にやや強い。雲母3％。礫含む。
4-2．10YR2/3 黒褐　締まり・粘性共にやや強い。雲母3％。4層より礫多く含む。
5．10YR4/3 にぶい黄褐　砂礫層。中粒砂。金雲母3％。礫 3cm ～ 20cm。地山層。

2．検出状況

遺物包含層を除去後、調査区ほぼ全面で礫が検出された。礫の性格としては、基本的に石垣側は石垣の裏込めの礫と思われる。調査区最北側では径の小さい礫が検出されるが南に行くにしたがって礫の径は大きくなる。裏門があったと想定される地点の礫下層および地山から石臼、すり鉢、石製加工品、砥石といった石製品が集中して出土している。さらに調査区南に径の大きい礫は続くが、次第に礫は少なくなり最南部では北側と同様礫の径は小さくなる。竪穴状遺構、礎石のような石列は確認されなかった。

第5章　出土した遺物

出土した遺物は、縄文土器片、平安期の土師器片、近世の陶磁器、陶質土器、銭、金属製品、石製品が出土している。縄文土器片、平安期の土師器片は出土状況から流れ込みと思われるが、石製品に関しては出土地点が集中しており、意図的に置いたと言うよりは廃棄したのではないかと思われる。

今回、明確な遺構は検出されなかったため、取り上げに関しては、比較的残存状況の良い土器片、金属、石製品はトータルステーションシステムで位置を計測し、その他の遺物は表土・遺物包含層一括や検出された礫をSXとし、グリッドに替わるものとして任意にSX北、SX中、SX南として位置関係を把握した。

次に出土遺物を示す。掲載順は、位置を計測した土器、礫層を北、中、南と区切って一括で取り上げた土器、遺物包含層・表土出土遺物、その後に金属製品、石製品の順で示した。

P 51は縄文土器の口縁部から胴部の破片である。口縁部は横位の二本の平行沈線、胴部は斜位の沈線が施され、沈線で区画された三角形の中は縄文を施している。後期の堀之内Ⅰ式に属すると思われる。

P 20は甕の底部から胴部下位の破片である。底部から外反した後やや内湾している。平底の底部には木葉痕。底部縁辺部はナデ調整され、その上部には縦位のハケメが施されている。内面はヘラケズリされている。平安時代と思われる。

P 38は土師器の坏の口縁部の破片で、口唇部は僅かに凹状の受口になっており、外に開いている。外・内面共にナデ調整が施されている。

P 45は甕の口縁部から胴部上位の破片である。口唇部の外側を欠いている。短い口縁部は肥厚しており、胴部は内側に直線的に伸びていると思われる。外面は磨滅している。口縁部の内面は横位のナデ調整が施されている。平安時代と思われる。

P72は口縁部から胴部、P56・8は口縁部から底部、P66は耳部の内耳土器である。焙烙形で口縁部、胴部ともに湾曲している。P56・8は外面全体にススが付着している。焙烙形を呈しており、いずれも近世と思われる。

P27は陶質土器の甕の胴部の破片である。外面の肩部から上には自然釉が掛かる。外面は肩部から上が横位のケズリ調整、下は斜位のケズリ調整が施される。内面はケズリ調整が施される。

P54は陶器の碗の底部から胴部上の破片である。ロクロ整形で高台・高台脇は無釉である。高台は削出し高台で兜巾が残る。内面の素地は鉄釉で白い粉引状の釉薬が見られる。

P52、P55、P62、P77は陶器の底部から胴部の破片である。いずれもロクロ整形で高台は削出し高台、高台・高台脇は無釉である。

S 11、O21、O22は縄文土器の小片である。S11は縄文、O21は雨垂れ文で縄文中期の曽利Ⅱもしくは Ⅲ式と思われる。O22は縄文が施されている。縄文時代中期中葉に属すると思われる。

O13は土師器の坏の口縁部から胴部の破片である。薄手である。器高は低い。口縁部はやや肥厚しながら直線的に外に開く。底部は平底で僅かだがハケメと思われる調整が認められる。底部外周はヘラナ

デされている。内面は横位のナデ調整が施されている。

S14 は陶質土器の甕の胴部である。外面は自然釉で外面の肩部より上はハケメ調整が施されている。内面はケズリ調整。指頭痕が残る。

O6 は焙烙の底部から胴部下の破片である。外面にはススが付着している。近世と思われる。

O7 は甕の口縁部から胴部上の破片である。口縁部は肥厚した厚口口縁を呈して胴部は下に直線的に伸びていると思われる。外面は、口唇部の上端面にハケメ、口縁部はヨコナデ、胴部は縦位のハケメ、内面は横位のハケメが施されている。平安時代と思われる。

O29 は甕の口縁部から胴部上部の破片である。短めの口縁部は外に開き先端部を肥厚させている。僅かに胴部が残るが真下に伸びていると思われる。外面は磨滅しているが僅かに横位のハケメ、内面の口縁部はナデ調整、胴部は斜位のハケメ調整が施されている。平安時代と思われる。

O23 は土師器の底部の破片である。薄手である。底部外周から中心に向かってやや窪でいる。回転糸切り痕が見られる。僅かに残る胴部は直線的に外に開く。

O4、O18 は陶器の底部から胴部下の破片で、いずれもロクロ整形で高台削出し高台、高台・高台脇は無釉である。

S13 は燈明皿で回転ロクロ調整が施される。

P8、S10 は青銅製品である。P8 は両面にS 10 は片面に装飾が施されている。

P53、P12、P13 は煙管である。P53 は火皿から雁首と羅宇で、羅宇は竹製である。P12、P13 は雁首である。

P70、O20 は「寛永通宝」で O20 は「通」字の部分の破片である。

P59 は石造物である。石材は安山岩である。周囲は面取り加工されているものの、表面の掘削痕は粗く残る。割口は石英等の不純物の部分で割れている痕跡が認められる。一つの可能性として、その形状から石仏の光背部分の未完成品と推測される。

P60、P50 は砥石である。端部は欠損している。直方体の砥石の四面が使用されており石材は凝灰岩である。P50 は中央に凹面の研磨面。側面に凸面の研磨面が有る。全体に被熱による黒色化が認められる。石材は安山岩である。

P73 はすり鉢である。石材は安山岩である。

P75、P76 は石臼である。P76 は主溝である粉を碾く「目」が六分画と思われる事から粉碾臼の可能性がある。

P50 は上下および側面に加工痕が残る。断定は出来ないが、その形状から石臼の未加工品の可能性が考えられる。

第6章　まとめ

調査にあたって、調査区域には嘗て円福寺があり門も存在していたと言う事や、中世の岩手氏の館跡の可能性がある事を想定し調査を開始した。

掘削した結果、調査区ほぼ全面で礫が検出された。調査区東側、南西ー北東方向に走る石垣脇の小礫や石垣側の上層の礫は石垣の裏込めの礫と思われるが、調査区全体を覆う礫下層の 50cm 大以上の礫は地山（砂質土）に潜っている状況が確認され、遺跡周辺にみられる低位段丘堆積物を構成している礫と考えて良いが、礫と礫が接していない、言わば浮いている大型の礫も検出されており、さらに礫間からは縄文土器片や平安期の土器片、近世の陶磁器、煙管、銭（寛永通宝）が出土している。出土状況から

流入している状況も見てとれる。

今回の調査では竪穴状の遺構は検出されなかったため、遺跡の性格の解明は困難であるが、出土した遺物をまとめてみると、

1．縄文土器の時期は、中期の曽利ⅠもしくはⅡから後期堀之内Ⅰ式期に該当すると思われる。
2．平安期の土器に関しては、いずれも小片で断定は出来ないが10世紀前半が想定される。
3．陶磁器片は、古唐津風の陶器の高台・高台脇が無釉で兜巾が残るものと高台が高いものは18世紀以降、見込の五弁花文が潰れている状況の染付は19世紀代と想定される。
4．煙管は、火皿から雁首の形態から19世紀代と思われる。
5．石製品に関しては、石臼、すり鉢、砥石と加工痕の残る礫が2点出土している。加工痕の残る礫は、その形状から石臼の未製品（遺物No.50）、石仏の光背（遺物No.59）と推測される礫は割れ口や調整の粗さを見ると製作途中で失敗し廃棄されたとの可能性も考えられる。

今回の調査では、礫層の検出から始まり石製品および加工途中の石製品の出土と、結果的に「石」が一つのキーワードとなった。遺跡周辺には石造物が多く分布し、石垣を積んだ家屋も多く、「石」と密接に関わるこの地区の一つの特徴が表れた結果となった。

当初想定していた円福寺や岩手氏に関わる遺構・遺物は検出されなかった。しかし、流入した遺物ではあるが、縄文土器片、平安期の土師器、陶磁器片など幅広い遺物が出土した事から、東田遺跡を含む岩手地区の様相を探る上で重要な調査であったと考える。

なお調査区にあった円福寺に関しては、『山梨市史』に以下の記録が記述されており引用する。

「廃寺　円福寺　山号　妙見山　本末　京都　西本願寺末
　本尊　阿弥陀如来　廃寺時期　大正年間以降か」

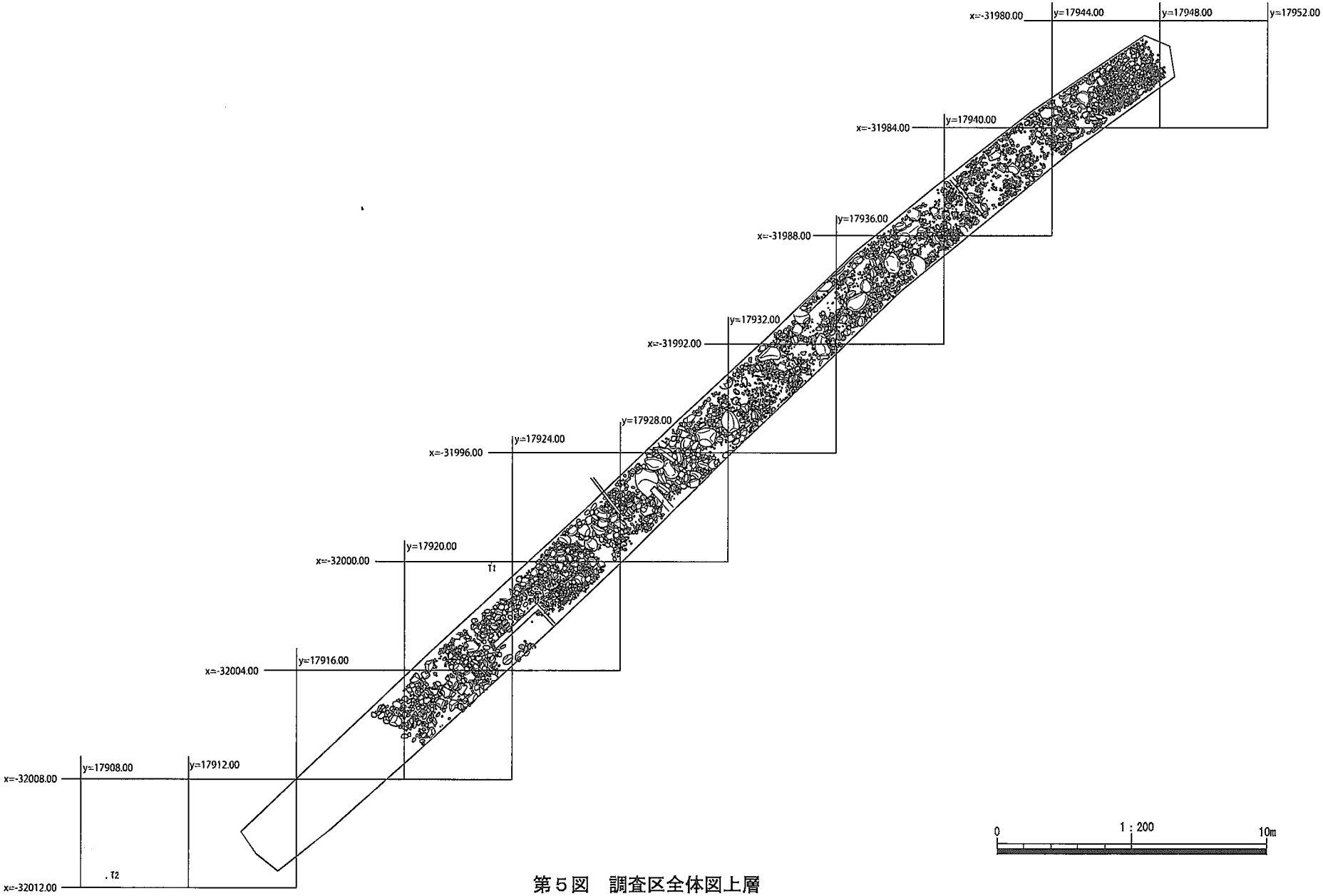
今回断定は出来ないが、石仏の光背と思われる破片が出土している。円福寺には地蔵菩薩の縁起がある。この像は大石明神の本地仏である地蔵を、神のお告げを受けた弘法大師空海が自刻したもので、岩上に刻んだ石仏のため、岩手地蔵と呼ばれ、岩手の地名の語源になったという地名起源説話にもなっている。天文二十二年には石造十王像を刻み、本尊（寺蔵）の脇に安置したという。慶応四年(1868)には二間四方の十王堂が境内にあって（寺記）、そこに安置されていたものと思われる。縁起に円福寺の関与がまったく見えないことからすると、この像は境外の仏堂から遷された可能性もある。

このような記述や周辺に多く分布する石造物を見ると、出土した石造物は石仏ではないかと言った推測も可能ではないかと考えられるし、岩手地区の特徴を物語っているのではないかとも思われる。

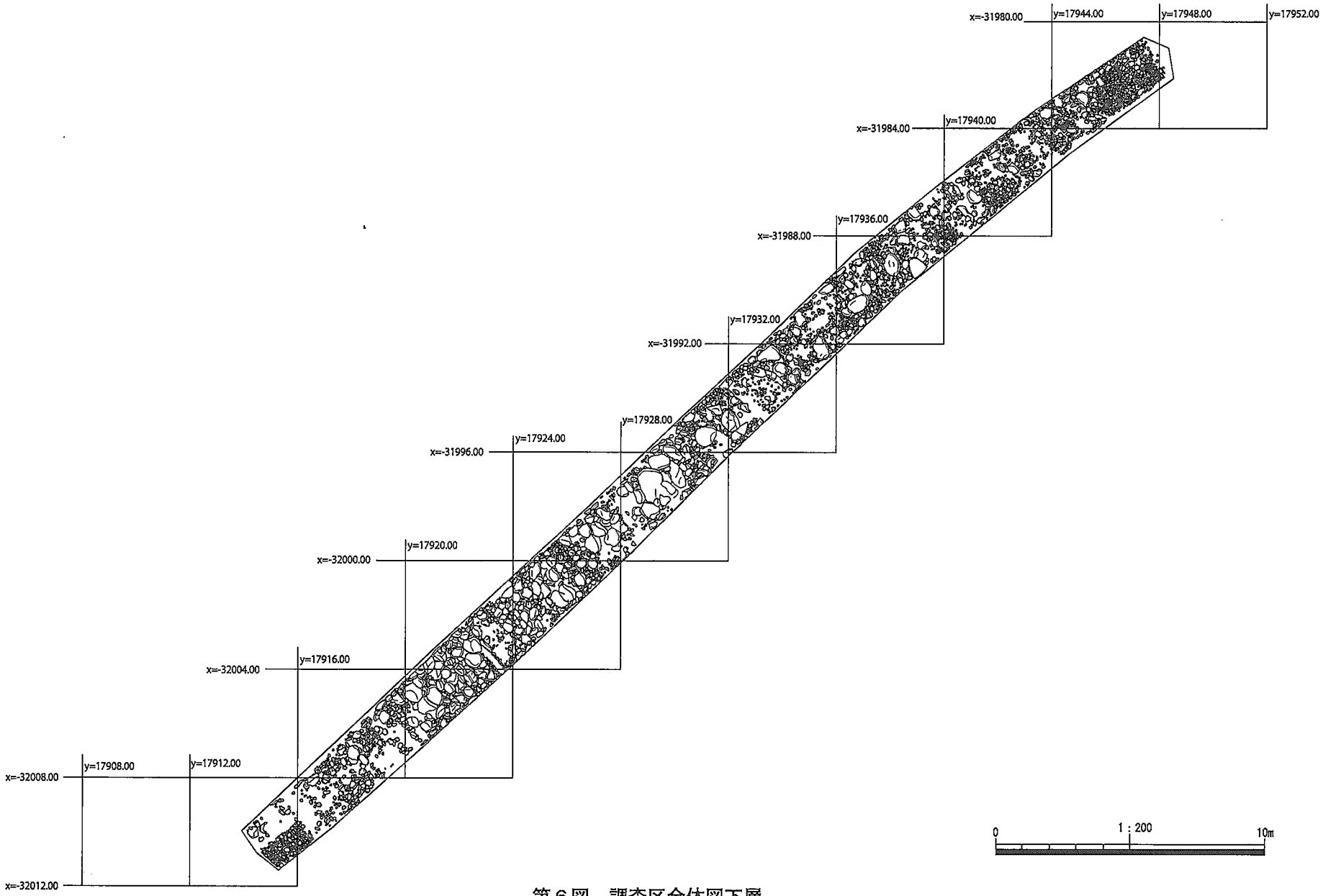
また、「若尾明細」円福寺の項には、

「円福寺　巌松山　東山梨郡岩手村字東田
宗派　真宗本願寺派　本山　本願寺　本尊　阿弥陀仏　檀徒　三百二十六人　建物　本堂七間×七間
庫裡　九間×六間　土蔵　三間×二間三尺　楼門　二間×二間　裏門　一間三尺×一間
境内　三百二十五坪（約1072.5m2）　官有地第四種
耕地　二反八畝二十四歩　地価百二十円七十二銭
山林　八反二十三歩　地価三百五十八円八十二銭」と紹介されている。

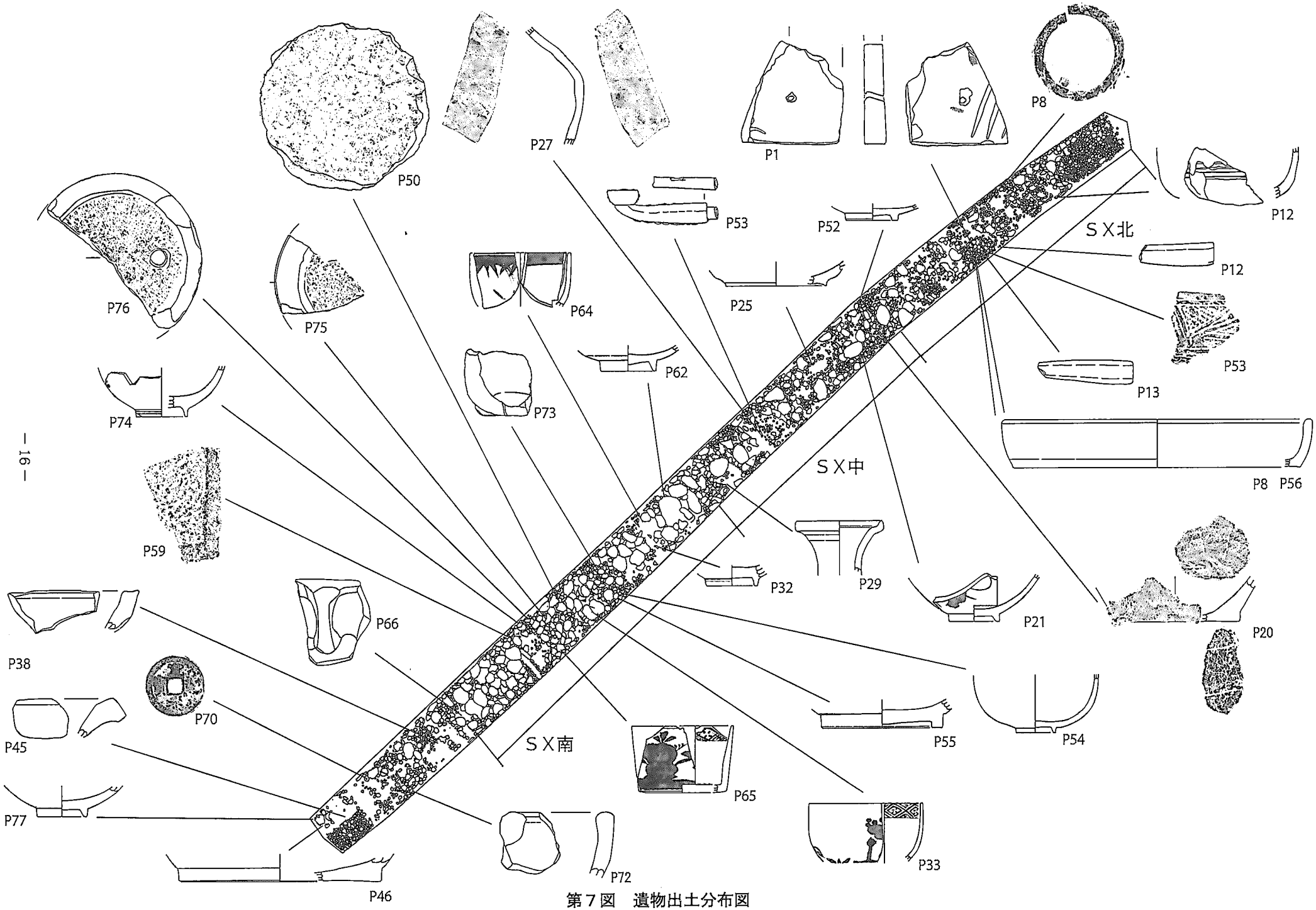
この中で、調査区にあった門に関しては、位置的には東門にあたり、裏門＝東門と言う説もあり、嘗て調査区に在った門は、裏門　一間三尺×一間が該当するのではないかと推測される。



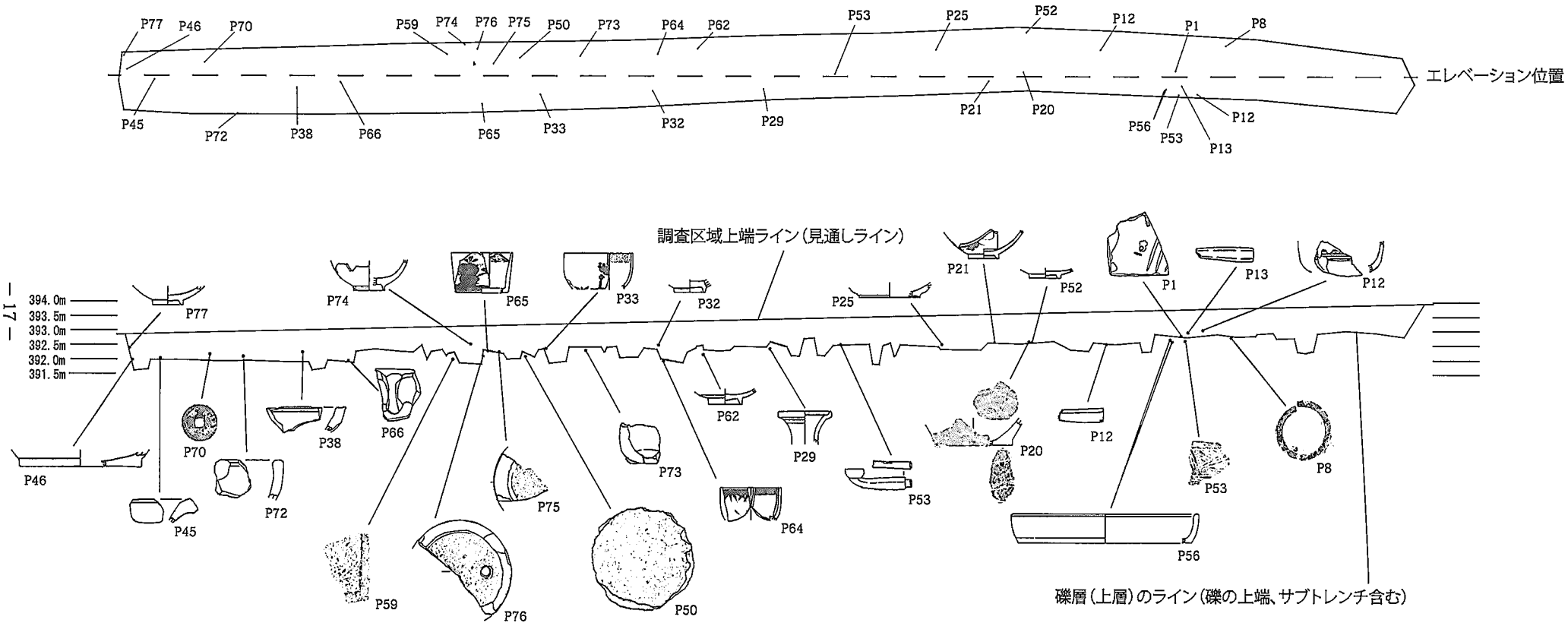
第５図　調査区全体図上層



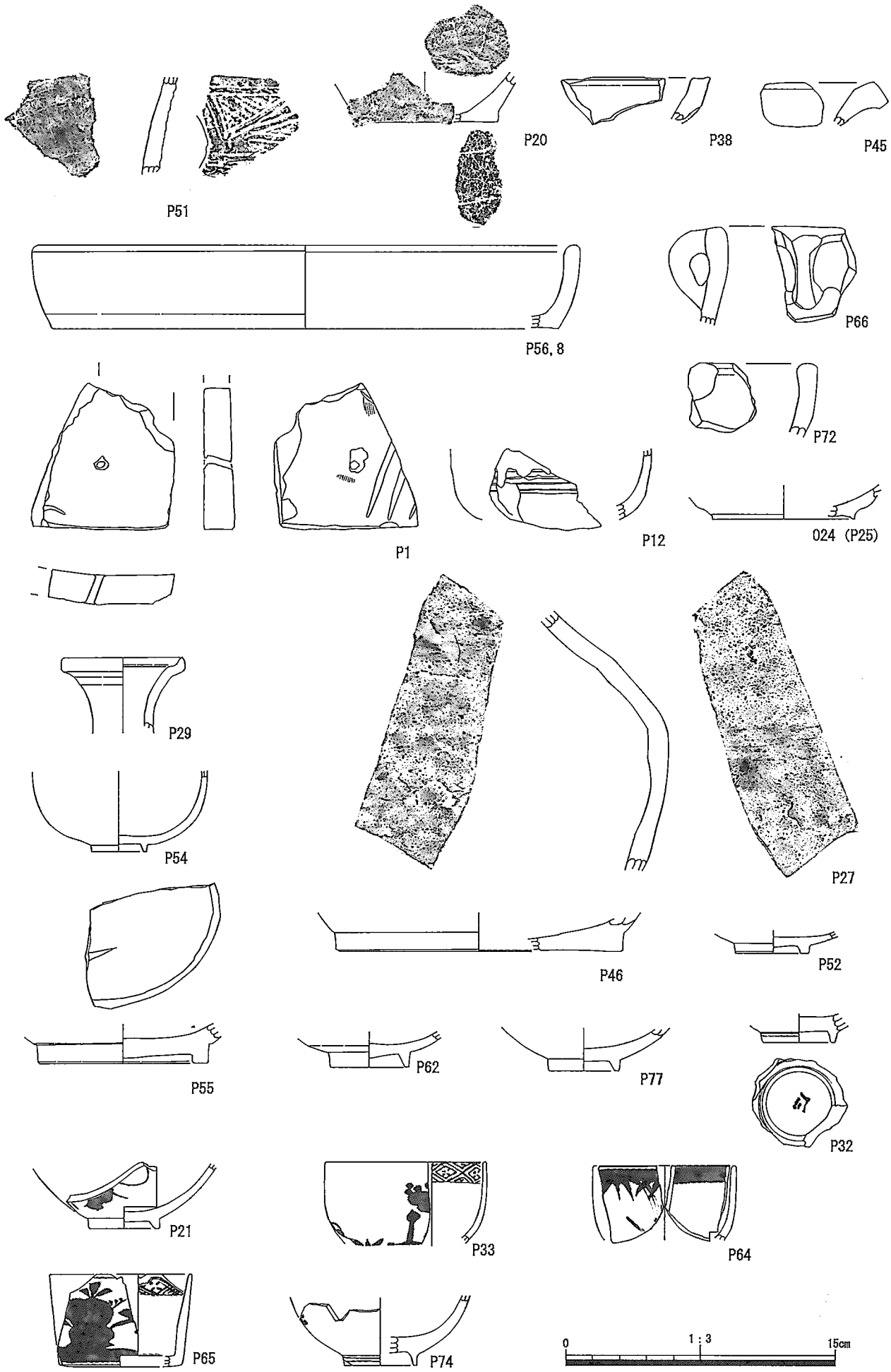
第６図　調査区全体図下層


P50
P27
P1
P8
P53
P52
P12
SX北
P12
P76
P75
P64
P25
P53
P13
P62
P73
P74
P8 P56
SX中
P59
P32
P29
P21
P20
P38
P66
P70
P45
SX南
P55
P54
P65
P77
P33
P72
P46

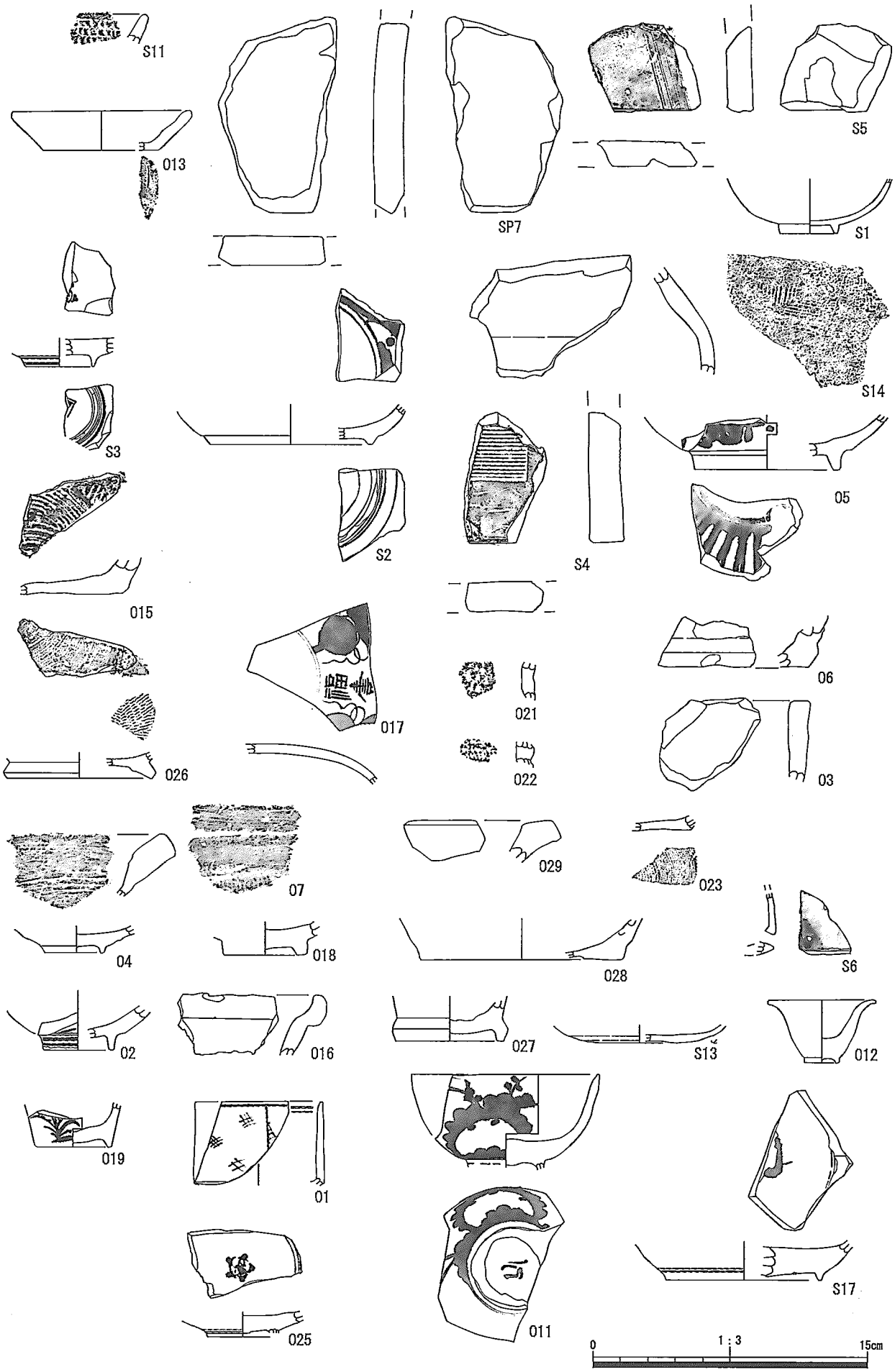
第７図　遺物出土分布図


P77
P46
P70
P59
P74
P76
P75
P50
P73
P64
P62
P53
P25
P52
P12
P1
P8
エレベーション位置
P45
P72
P38
P66
P65
P33
P32
P29
P21
P20
P56
P53
P12
P13
調査区域上端ライン（見通しライン）
394.0m
393.5m
393.0m
392.5m
392.0m
391.5m
P77
P74
P65
P33
P32
P25
P21
P52
P1
P13
P12
P46
P70
P38
P66
P62
P29
P20
P12
P8
P45
P72
P75
P73
P53
P53
P64
P56
P59
P76
P50
礫層（上層）のライン（礫の上端、サブトレンチ含む）

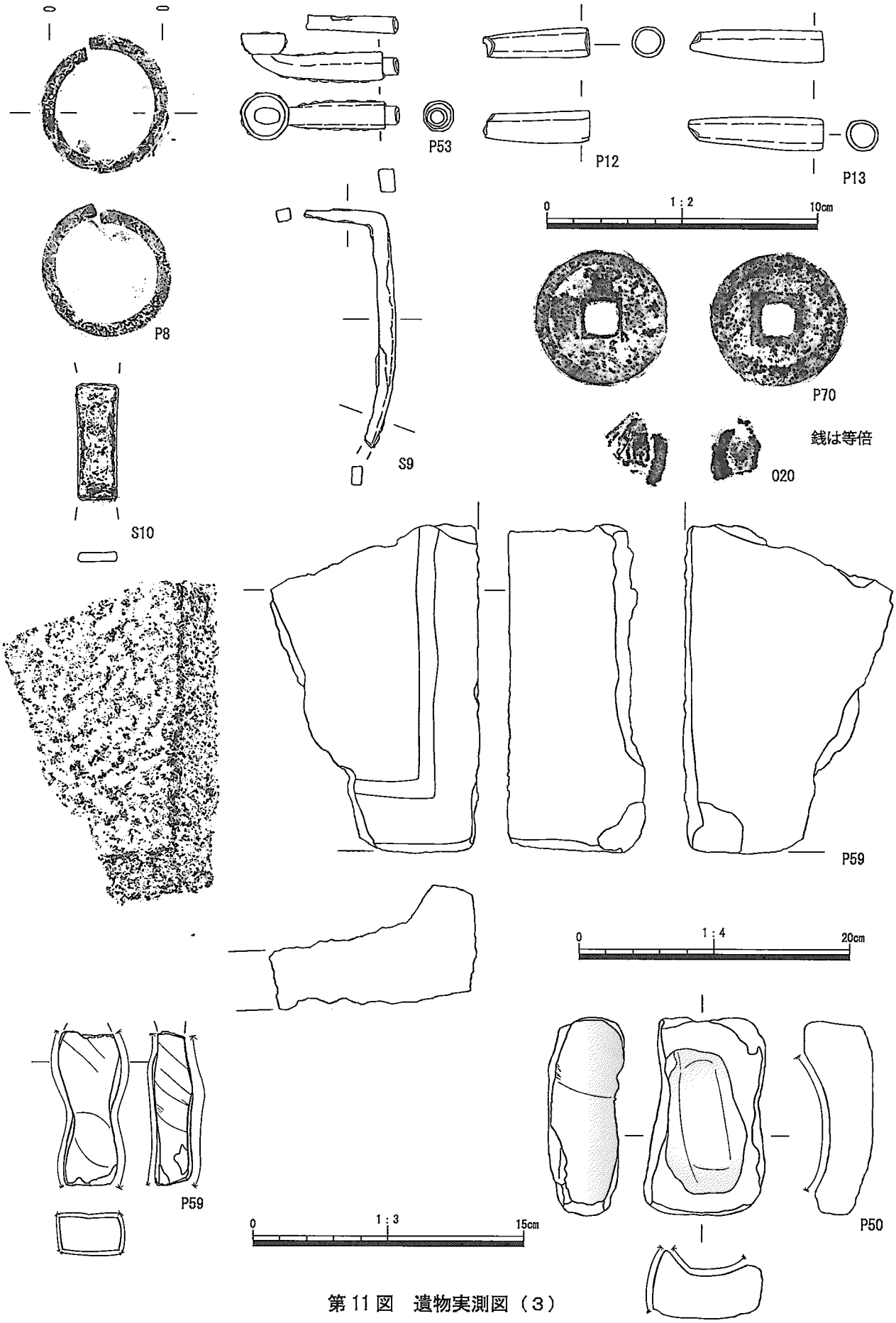
第８図　遺物出土断面図


P51
P20
P38
P45
P56, 8
P66
P72
P1
P12
024 (P25)
P29
P27
P54
P46
P52
P55
P62
P77
P32
P21
P33
P64
P65
P74
0
1 : 3
15cm

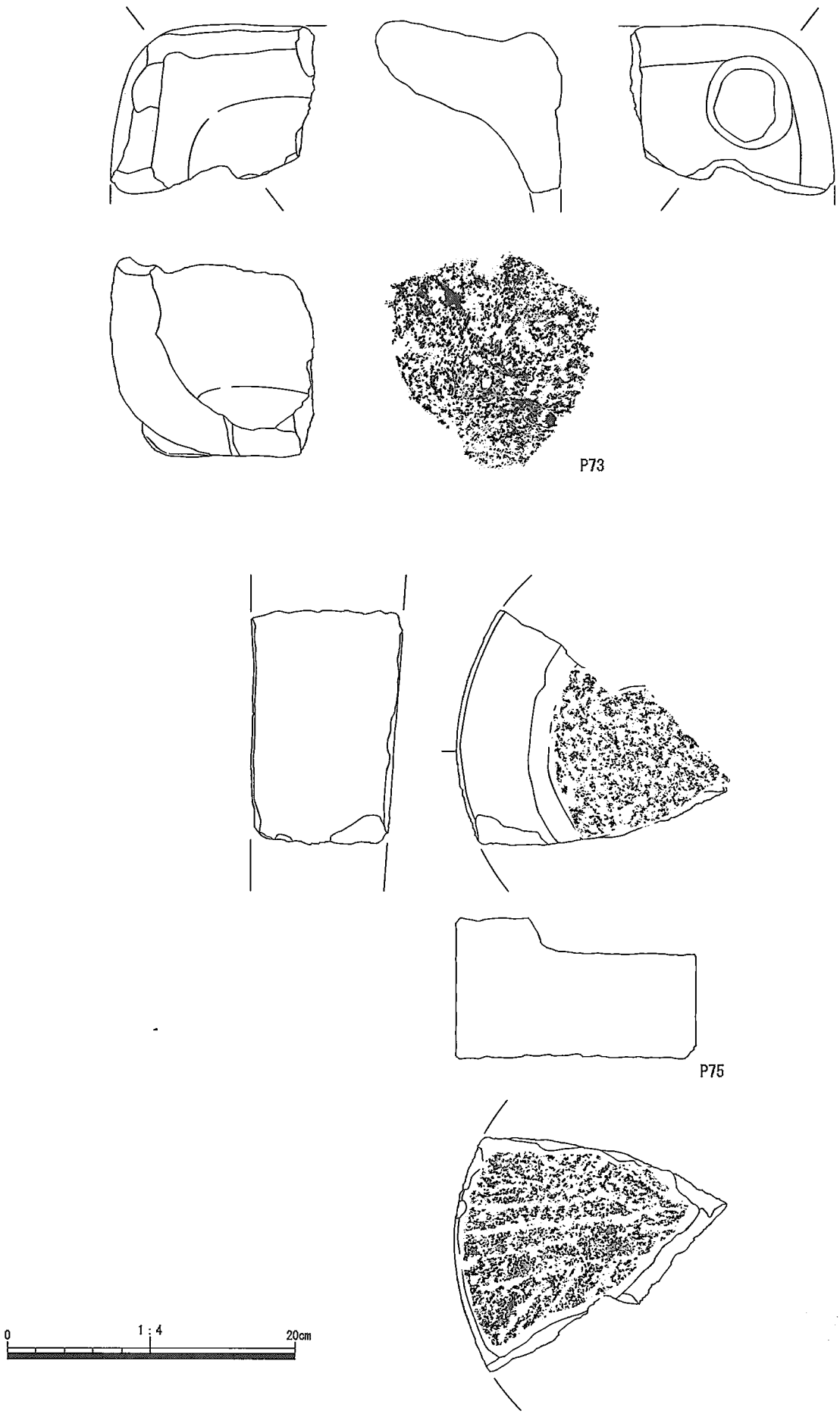
第９図　遺物実測図（１）


S11
013
SP7
S5
S1
S14
S3
S2
S4
05
015
017
021
022
06
026
03
07
029
023
04
018
028
S6
02
016
027
S13
012
019
01
011
S17
025
0
1:3
15cm

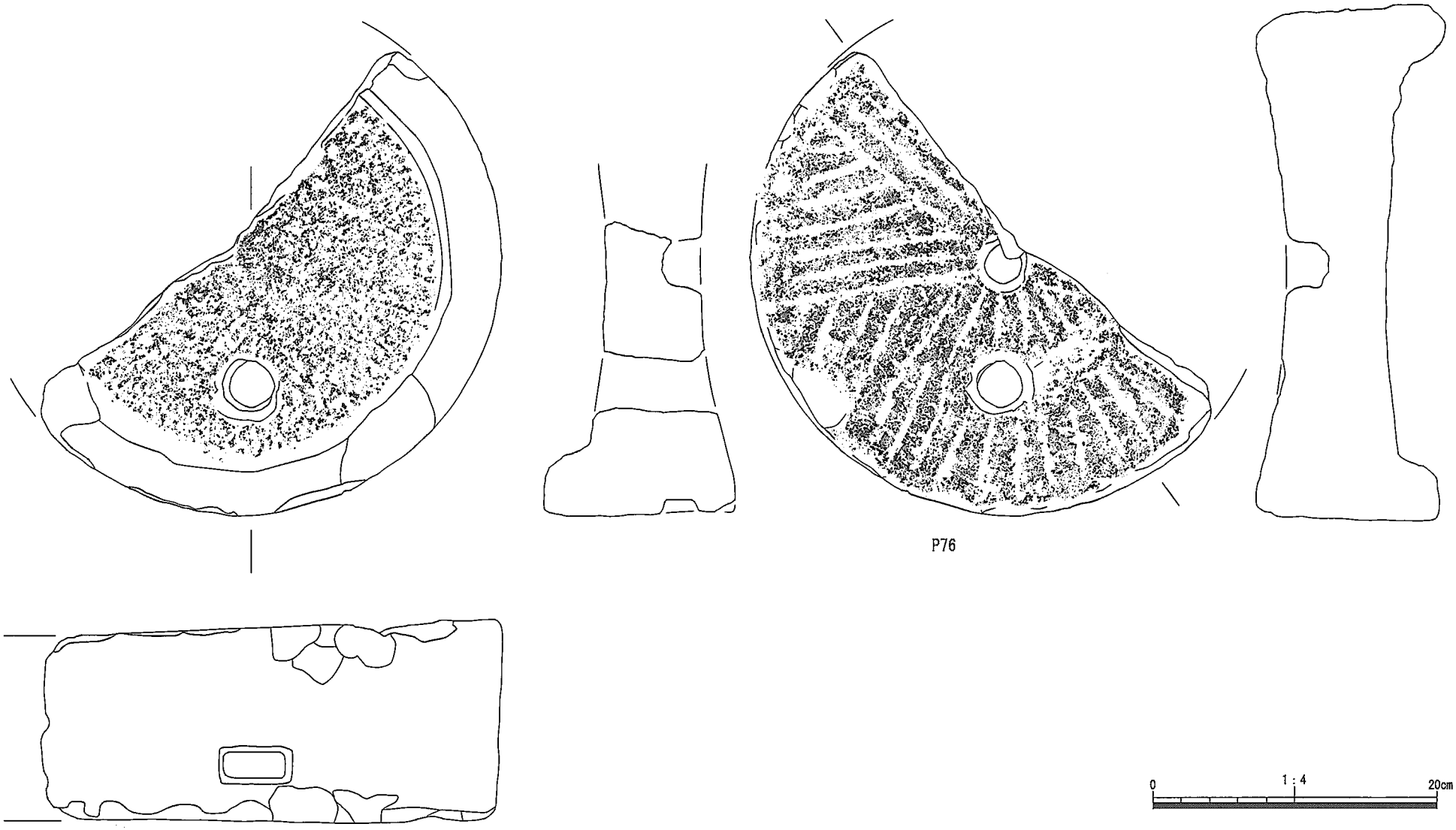
第10図　遺物実測図（2）


P53
P12
P13
0
1：2
10cm
P8
S9
P70
銭は等倍
020
S10
P59
0
1：4
20cm
P59
0
1：3
15cm
P50

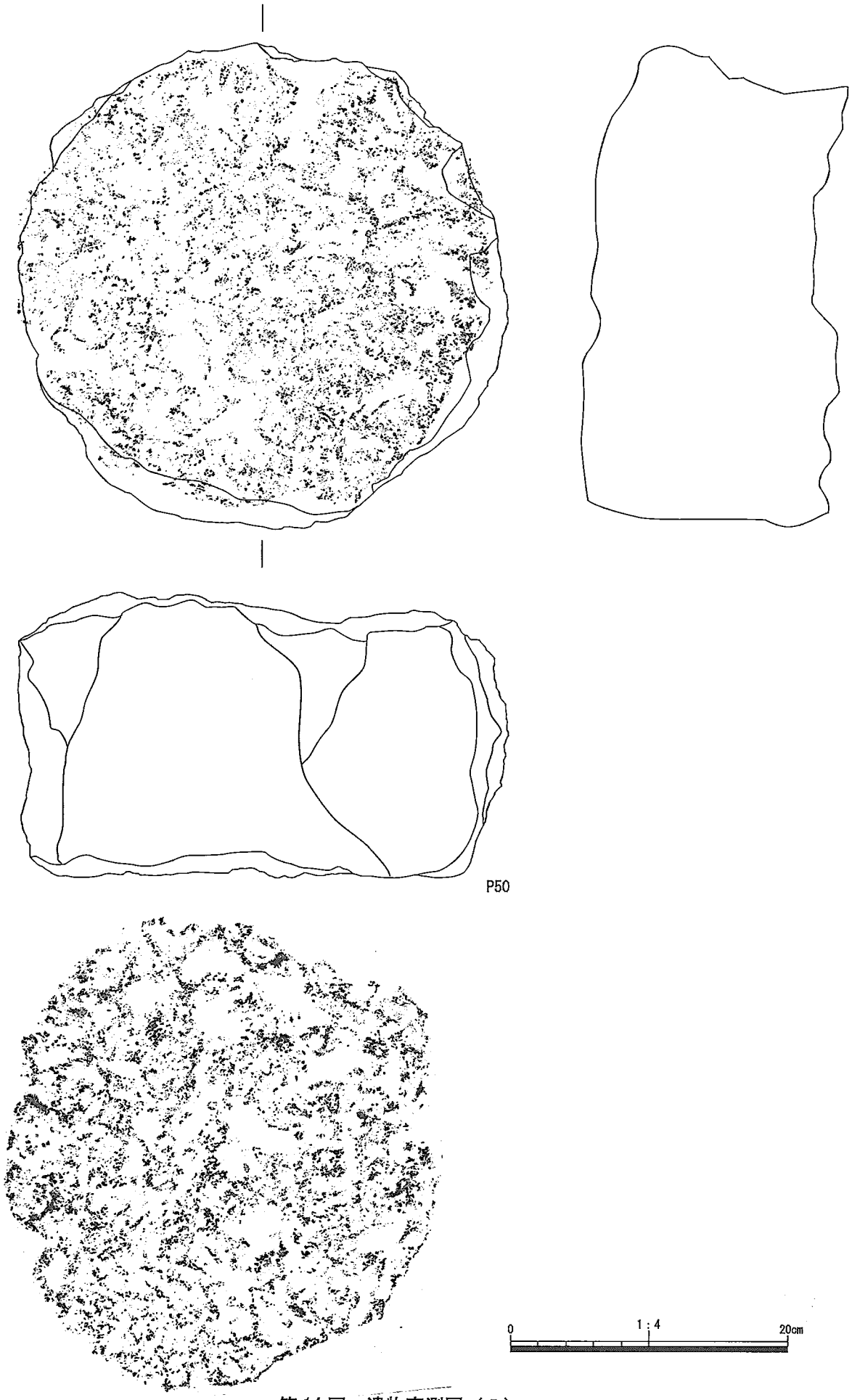
第 11 図　遺物実測図（3）



第 12 図　遺物実測図（4）



第13図　遺物実測図（5）



第14図　遺物実測図（6）

表４　遺物観察表（１）

実測番号	挿図番号	出土地点		取り上げNO.	種別	器種	法量(cm)、( )は復元値、< >は現存値			部位	調整の特徴		色調		胎土	焼成	備考
		位置	層位				口径	底径	器高		外面	内面	外面	内面			
P51				P51	縄文	甕	―	―	<5.7>	胴部	口縁部ー平行沈線、斜位の沈線と区画内に縄文。		10YR4/1 褐灰	7.5YR5/3 にぶい褐	密、白色粒、金雲母	良好	
P20				P20	土師器	甕	―	(4.8)	<2.8>	底部～胴部下	ハケメ　底部ー木葉痕	ケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	密	良好	
P38				P38	土師器	坏	―	―	<2.7>	口縁～胴上	口縁端部ーハケメ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい褐	密、赤・白色粒、金雲母	良好	
P45				P45	土師器	甕	―	―	<3.2>	底部～胴下	底部ーナデ、胴下ーナデ	ケズリ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	白・黒色粒、金雲母	良好	
P56,8				P56,8	陶質土器	内耳	(30.6)	(28.2)	4.7	口縁～底部	ナデ	ナデ	10YR3/1 黒褐	7.5YR6/4 にぶい褐	白・黒色粒、金雲母	良好	焼焔状、外面にスス付着
P66				P66	陶質土器	内耳	―	―	<5.4>	耳	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい褐	密、白色粒、金雲母	良好	
P72				P72	陶質土器	内耳	―	―	<3.8>	口縁～胴中	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	密、赤・白色粒、金雲母	良好	
P1				P1	瓦		8.1	7.8	1.5				7.5Y3/1 オリーブ黒	7.5Y3/1 オリーブ黒	密、白色粒	良好	法量は長さ、幅、厚さ
P12				P12	陶器	碗	―	―	<4.0>	胴部	ロクロ、鉄釉	灰釉	10YR2/2 黒褐	7.5Y7/2 灰白	緻密	良好	
P25			O24	P25	陶器	皿	―	(8.0)	(1.9)	底部	高台・高台脇ー無釉	灰釉	2.5 Y 5/4 黄褐	7.5Y7/2 灰白	緻密	良好	
P27				P27	陶器	甕	―	―	<14.6>	胴上	鉄釉	鉄釉	5YR4/3 にぶい赤褐色	10YR3/2 黒褐	緻密	良好	
P29				P29	陶器	瓶	(6.8)	―	<4.2>	口縁～胴上	灰釉	灰釉	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	緻密	良好	
P46				P46	陶器	鉢	―	(16.0)	<2.2>	底部	底部ーヘラケズリ 高台・高台脇ー無釉	灰釉	5Y6/2 灰オリーブ	2.5Y6/2 灰黄	緻密	良好	
P52				P52	陶器	碗	―	4.0	<1.8>	底部～胴下	鉄釉、ロクロ	灰釉	7.5YR3/4 暗褐	7.5Y7/2 灰白	緻密	良好	
P54				P54	陶器	碗	―	3.1	<4.5>	底部～胴中	灰釉	灰釉	5Y7/2 灰白		緻密	良好	
P55				P55	陶器	皿	―	(9.6)	<2.2>	底部～胴下	ロクロ、高台ー削出し　高台・高台脇ー無釉　兜巾	素地ー鉄釉　全面に粉引状の白い釉薬	2.5Y5/4 黄褐	10YR6/6 明黄褐、2.5Y8/1 灰白	緻密	良好	
P62				P62	陶器	碗	―	4.4	<2.0>	底部～胴下	鉄釉　ロクロ、高台ー削出し 高台・高台脇ー無釉　兜巾	鉄釉	2.5Y6/6 明黄褐	2.5Y6/6 明黄褐	緻密	良好	
P77				P77	陶器	碗	―	4.0	<2.4>	底部～胴中	透明釉　ロクロ、高台ー削出し 高台・高台脇ー無釉	透明釉	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	緻密	良好	
P21				P21	陶器	碗	―	(4.0)	<3.5>	底部～胴中	高台・高台脇ー無釉　ロクロ、ケズリ	灰釉	7.5 Y 7/1 灰白	7.5 Y 7/1 灰白	緻密	良好	
P32				P32	磁器	碗	―	4.0	<1.6>	底部～胴下			5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	密	良好	染付
P33				P33	磁器	碗	(9.0)	―	<4.6>	口縁～胴下			5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	緻密	良好	染付
P64				P64	磁器	碗	(8.0)	―	<4.2>	口縁～胴中			5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	密	良好	染付
P65				P65	磁器	碗	(8.0)	―	<5.7>	口縁～胴下			5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	密	良好	染付
P74				P74	磁器	碗	―	(4.0)	<3.4>	底部～胴中			5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	密	良好	染付
S11		SX北	礫層	一括	縄文	甕	―	―	1.7	口縁部	縄文		7.5YR5/4 にぶい褐	5YR5/4 にぶい赤褐	密、白色粒	良好	縄文
SP7		SX北	礫層	一括	瓦		15.0	5.8	1.7				10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐	密	良好	法量は長さ、幅、厚さ
S5		SX北	礫層	一括	瓦		4.8	6.0	0.9				10YR2/1 黒	10YR2/1 黒	密	良好	法量は長さ、幅、厚さ
S14		SX北	礫層	一括	陶器	甕	―	―	<5.7>	胴中	ハケメ	ケズリ、指頭痕、灰釉	2.5Y7/2 灰黄	5Y4/1 灰	密、白色粒	良好	
O17		SX北	礫層	一括	磁器		(11.0)	―	(1.9)	胴中			5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	緻密	良好	染付

表５　遺物観察表（２）

実測番号	挿図番号	出土地点 位置	出土地点 層位	取り上げNO.	種別	器種	法量(cm)、( )は復元値、< >は現存値 口径	底径	器高	部位	調整の特徴 外面	調整の特徴 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	備考
O13		SX中	礫層	一括	土師器	皿	—	(6.4)	(2.3)	口縁～底部	ナデ　底部ーハケメ、外周はナデ	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	緻密	良好	
S3		SX中	礫層	一括	磁器	碗	—	4.0	<1.6>	底部～胴下		見込	7.5GY8/1明緑灰	7.5GY8/1明緑灰	緻密	良好	
S1		SX中	礫層	一括	陶器	碗	—	3.0	<3.0>	底部～胴中	灰釉　高台・高台脇ー無釉　ロクロ　削出し高台	灰釉	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	緻密	良好	
S2		SX中	礫層	一括	磁器	皿	—	(9.0)	<2.2>	底部～胴下	高台端ー無釉	見込	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	緻密	良好	染付
S4		SX南	礫層	一括	瓦		7.2	4.2	1.9				7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	密	良好	法量は長さ、幅、厚さ
O5		SX南	礫層	一括	陶器	碗	—	(8.0)	(3.0)	底部1/4	鉄釉　高台・高台脇ー無釉　ロクロ　削出し高台	鉄釉に放射状の銅緑釉	2.5Y8/4淡黄、10Y3/2オリーブ灰	2.5Y8/4淡黄、10Y3/2オリーブ灰	緻密	良好	
O15		SX南	礫層	一括	陶器	擂鉢	—	—	(2.0)	底部～胴部下	鉄釉	鉄釉	7.5YR4/2灰褐	7.5YR6/6橙	密	良好	
O26		SX南	礫層	一括	陶器	擂鉢	—	(8.0)	(1.7)	底部	高台・高台脇ー無釉	鉄釉	5YR5/8明赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	緻密	良好	
O21			遺物包含層	一括	縄文		—	—	(2.1)	胴	雨垂文		5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	密	良好	曽利Ⅰもしくは曽利Ⅱ
O22			遺物包含層	一括	縄文		—	—	(1.4)	胴	縄文		5YR5/4明赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	密	良好	縄文時代中期中葉
O6			遺物包含層	一括	糖質土器	焙烙	—	—	(2.7)	底部	スス付着		5YR2/1黒褐	5YR6/6橙	緻密	良好	焙烙
O3			遺物包含層	一括	糖質土器	焙烙	—	—	(5.0)	口縁部	スス付着		10YR1.7/1黒	2.5YR5/6明赤褐	密	良好	焙烙
O7			遺物包含層	一括	土師器	甕	—	—	(3.5)	口縁部	口唇部の上端面にハケメ、口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケメ	横位のハケメ	5YR5/8明赤褐	5YR5/8明赤褐	密	良好	平安時代
O29			遺物包含層	一括	土師器	甕	(4.2)	—	(1.9)	口縁部	横位のハケメ	口縁部ーナデ調整、斜位のハケメ	5YR5/8明赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	密	良好	
O23			遺物包含層	一括	土師器	皿	—	(7.0)	(0.7)	底部	底部ー回転糸切り痕		7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	緻密	良好	
O4			遺物包含層	一括	陶器	碗	—	3.4	(2.5)	底部	白色釉　ロクロ、高台ー指で整形　高台・高台脇ー無釉　兜巾　胴部ーケズリ	白色釉	7.5Y8/1灰白	7.5Y8/1灰白	緻密	良好	
O18			遺物包含層	一括	陶器	碗	—	(4.6)	(1.8)	底部	高台・高台脇ー無釉　ロクロ　削出し高台　兜巾	鉄釉	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	緻密	良好	
O28			遺物包含層	一括	陶器	皿	—	(11.0)	(2.3)	底部～胴部下	透明釉　高台ー無釉　ケズリ	透明釉	5Y7/2灰白	2.5Y7/3浅黄	密	良好	
O2			遺物包含層	一括	磁器	碗	—	4.0	(2.4)	底部～胴下			5GY8/1灰白	5GY8/1灰白	緻密	良好	
S6			遺物包含層	一括	磁器	水滴	3.6	2.7	0.5	水差し部分			5GY8/1灰白	5GY8/1灰白	緻密	良好	法量は長さ、幅、厚さ
O16			表土	一括	陶器	鉢	(5.1)	—	(3.3)	口縁部			2.5Y4/2暗灰黄	2.5Y4/2暗灰黄	密	良好	
O27			表土	一括	磁器	壺	—	(6.0)	(2.5)	底部		ナデ	5GY8/1灰白	5GY8/1灰白	緻密	良好	
S13			表土	一括	陶器	燈明皿	—	(4.2)	<1.0>	底部	回転ロクロ　無高台平形	見込ー環状痕	7.5YR3/4暗褐	7.5YR3/4暗褐	緻密	良好	
O12			表土	一括	磁器	盃	(6.0)	2.0	(3.5)	口縁～底部			7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	緻密	良好	染付
O19			表土	一括	磁器	盃	—	(4.4)	1.9	底部1/2			7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	緻密	良好	染付
O1			表土	一括	磁器	碗	(7.0)	—	(4.4)	口縁～胴			7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	緻密	良好	染付
S17			表土	一括	磁器	碗	—	(8.4)	<2.1>	底部			7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	緻密	良好	染付
O25			表土	一括	磁器	碗	—	(3.8)	(1.2)	底部		見込ー五弁花文	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	緻密	良好	染付
O11			表土	一括	磁器	碗	(10.2)	(4.2)	(5.1)	口縁～底部			7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	緻密	良好	染付

表６　遺物観察表（金属製品）（３）

実測番号	挿図番号	出土地点		取り上げNO.	種別	器種	法量(cm)、( )は復元値、< >は現存値			部位	備考
		位置	層位				長さ	幅	厚さ		
P8				P8	金属	装飾品	5	4.7	0.2		青銅、文様有り
P12				P12	金属	煙管	3.9	1.2	0.15	雁首	
P13				P13	金属	煙管	4.9	1.2	0.15	雁首	
P53				P53	金属	煙管	5.8	1.0	0.15	火皿、雁首、羅宇	
P70				P70	金属	銭	2.5	0.6	0.15	寛永通宝	法量は外径、穿径、厚さ
S10		SX南	礫層	一括	金属	装飾品	4.3	1.4	3.5		青銅、文様有り
O20			遺物包含層	一括	金属	銭	－	－	0.15	寛永通宝	「通」の部分。法量は外径、穿径、厚さ
S9			表土	一括	金属	鎹	<8.8>	0.5	0.9		

表７　遺物観察表（石製品）（４）

実測番号	挿図番号	出土地点		取り上げNO.	種別	器種	法量(cm)、( )は復元値、< >は現存値				備考
		位置	層位				長さ	幅	厚さ	重量(kg)	
P59				P59	石製品	石像	<24.5>	<15.4>	10.2	4.0	角部分のみ残存
P60				P60	石製品	砥石	<8.6>	3.5	2.3	93.5g	端部欠損。直方体の砥石の四面が使用されている。石材は凝灰岩。
P50				P50	石製品	砥石	11.1	6.7	4.2	423.7g	中央に凹面の研磨面。側面に凸面の研磨面有り。全体に被熱による黒色化が認められる。石材は安山岩。
P73				P73	石製品	すり鉢	＜12.8×10.4＞	＜11.1×8.7＞	16.7	1.9	円形か方形か三足か四足か不明
P75				P75	石製品	挽臼の上臼	32.6（推定直径）	－	9.8（高さ）	3.0	1/6残存。
P76				P76	石製品	挽臼の上臼	37.0（直径）	－	14.2（高さ）	13.2	1/2残存。
P50				P50	石製品	加工品	35.4（直径）	－	20.7（高さ）		台、礎石、石臼未製品？

参考文献

山梨市　2007『山梨市史　通史編　上巻』

山梨市　2005『山梨市史　史料編　考古・古代・中世』

山梨市　2005『山梨市史　文化財・社寺編』

小林達雄 編集　2008『総覧　縄文土器ー小林達雄先生古希記念企画ー』 アム・プロモーション

山梨県立考古学博物館・山梨県埋蔵文化財センター　1993『研究紀要９ 10周年記念論文集』

　森原明廣「山梨県地域における内耳土器の系譜」

山梨県考古学協会　1992『甲斐型土器ーその編年と年代ー』甲斐型土器研究グループ

甲府市教育委員会　2013『甲府城下町遺跡Ⅸ』

山梨県教育委員会　2004『甲府城下町遺跡』

江戸遺跡研究会［編］　2001『図説江戸考古学研究事典』

1．調査区石垣（北から）

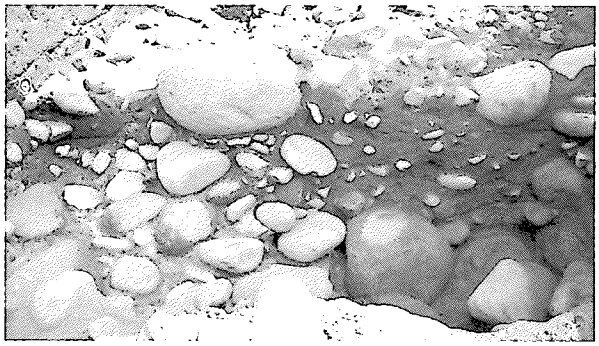
2．調査区石垣（南から）

3．礫検出状況（遺物包含層除去後）（南から）

5．礫検出状況（北側上層）（北から）

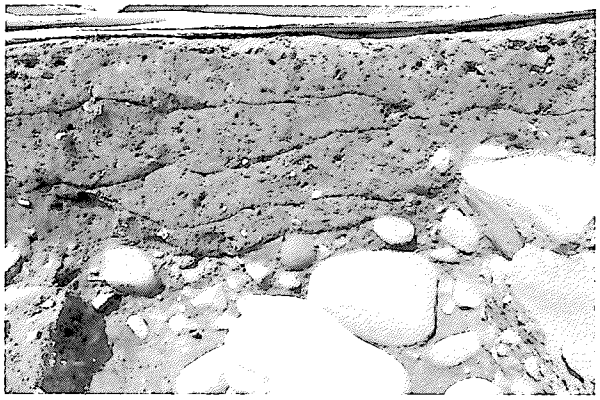
4．礫検出状況（上層）（南から）

6．調査区最北部西・北壁土層断面（南東から）



7．サブトレンチ１北壁土層断面

8．サブトレンチ１東壁土層断面

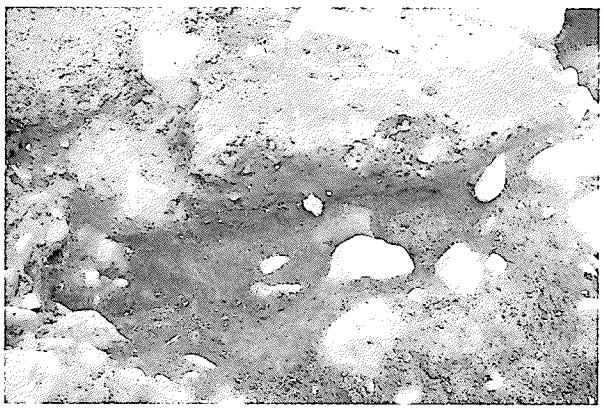


9．サブトレンチ３西壁土層断面

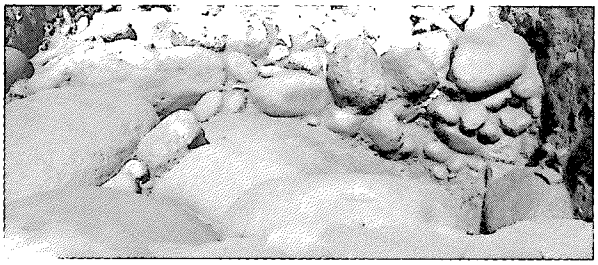
10．サブトレンチ３東壁土層断面

11．サブトレンチ４西壁土層断面

12．サブトレンチ４東壁土層断面



13．サブトレンチ４ 北壁土層断面

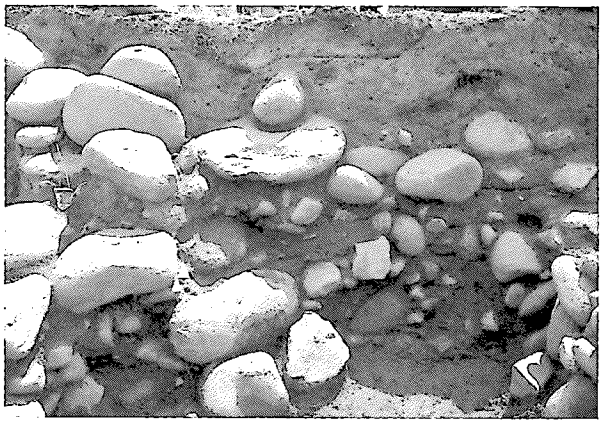


14. サブトレンチ7北壁土層断面

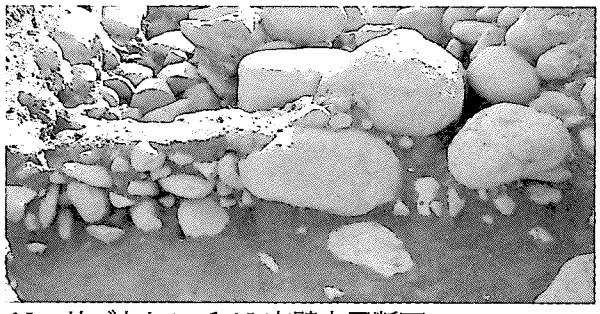
15. サブトレンチ7西壁土層断面

16. サブトレンチ9西壁土層断面

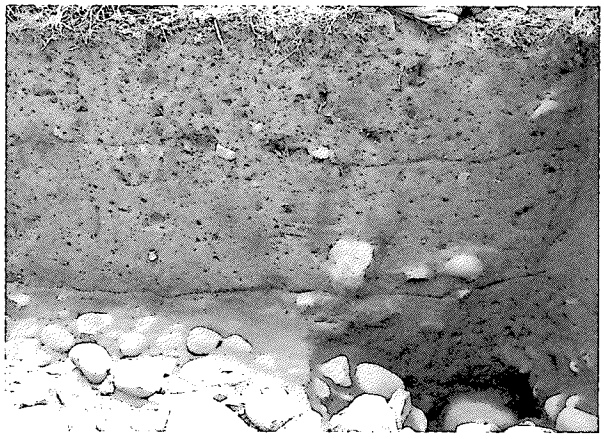
17. サブトレンチ9北壁土層断面



18. サブトレンチ12東壁土層断面

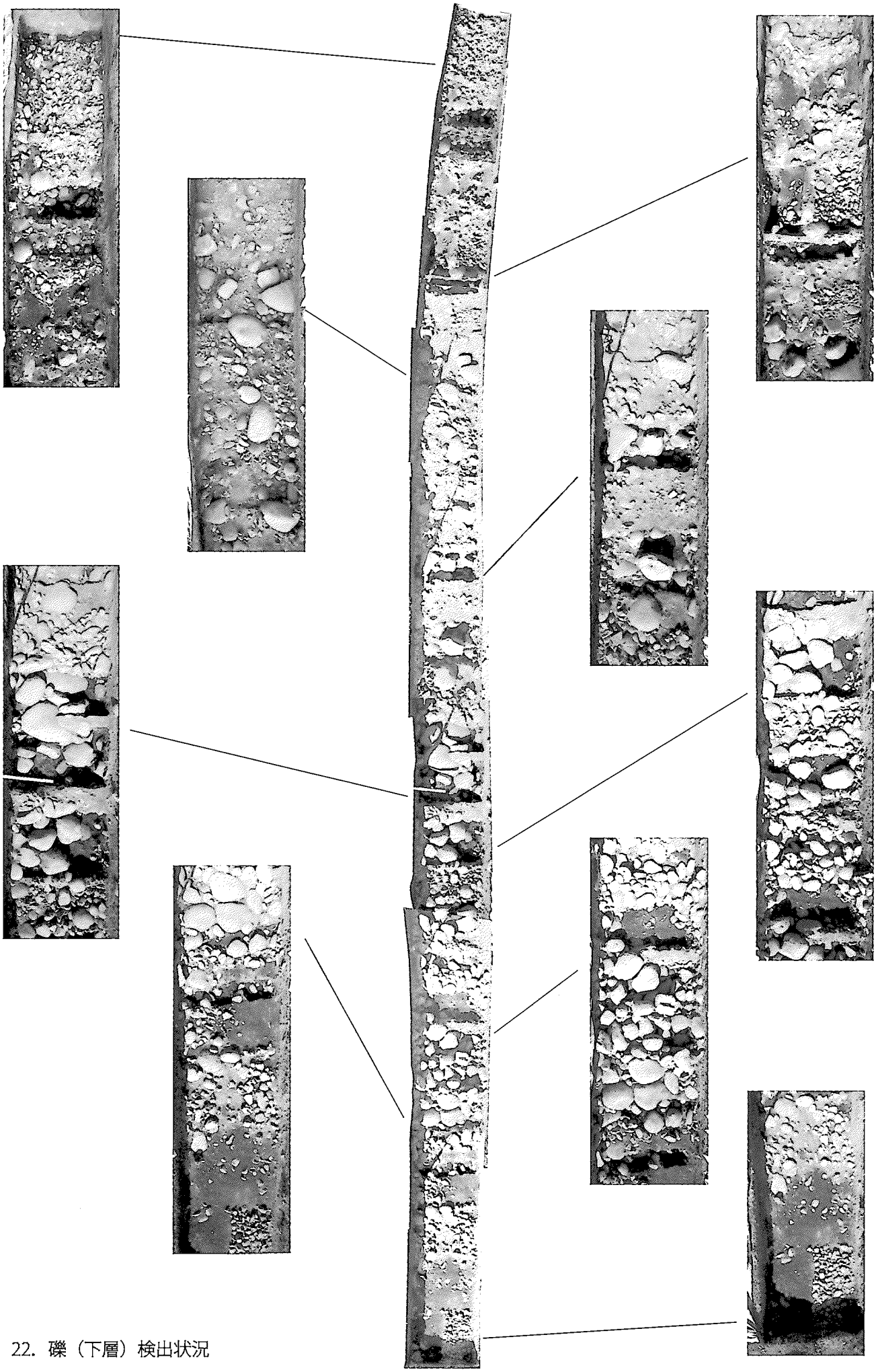


19. サブトレンチ12南壁土層断面

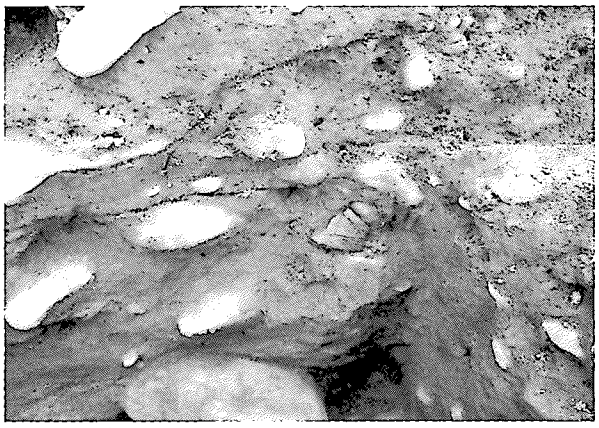


20. 調査区最南側東壁土層断面

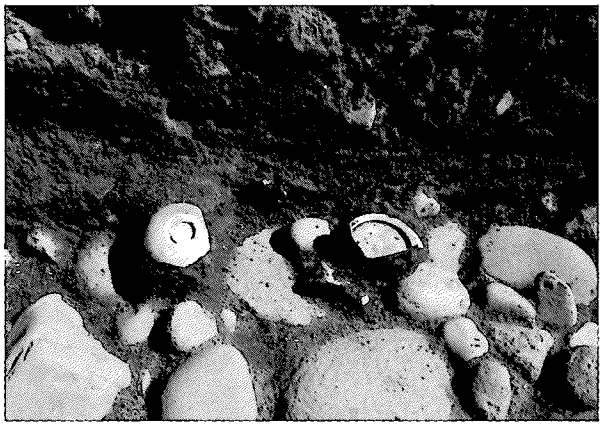
21. 調査区最南側南壁土層断面



22. 礫（下層）検出状況



23. サブトレンチ１東壁　縄文土器出土状況

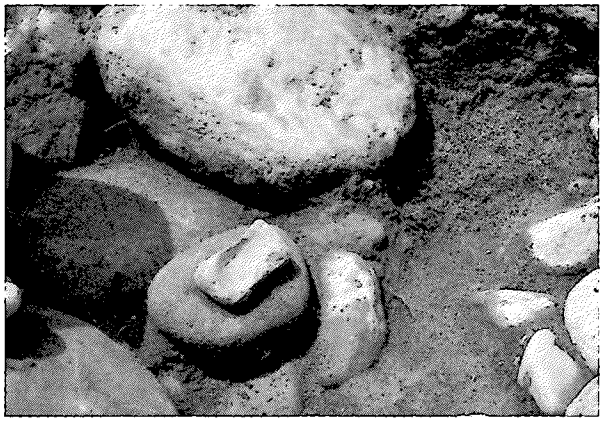


24. 陶磁器出土状況

25. 陶器出土状況

26. 煙管出土状況

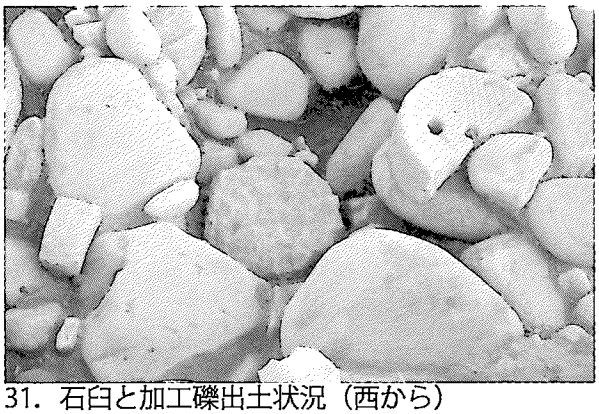
27. すり鉢出土状況



28. 砥石出土状況

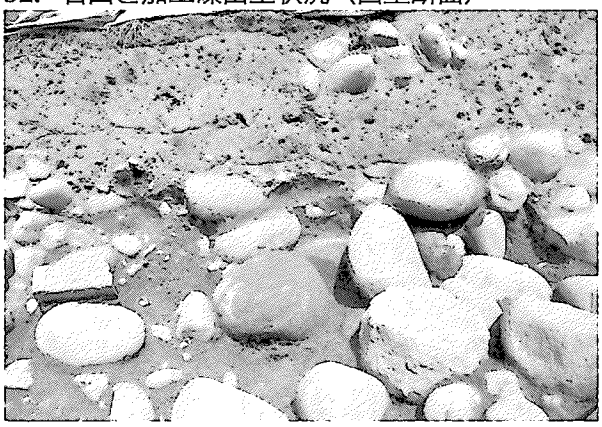
29. 石臼出土状況

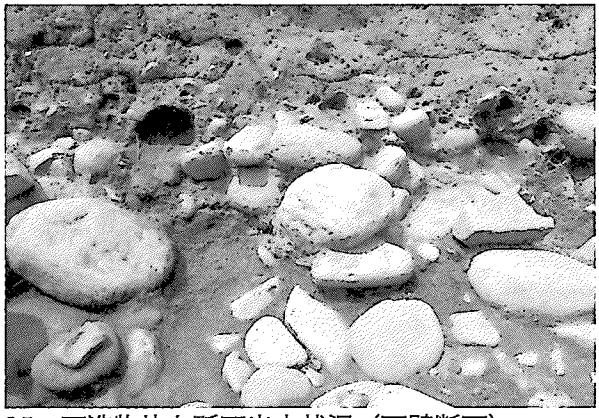
30. 石臼出土状況（断面）

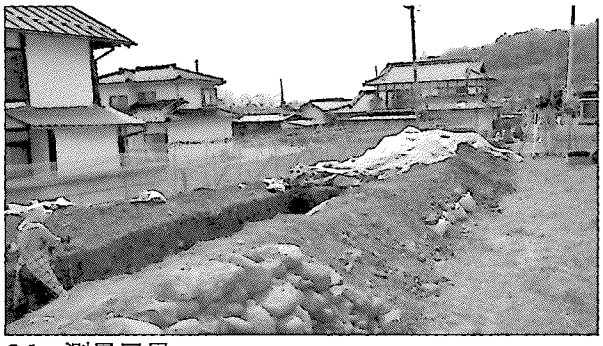

31. 石臼と加工礫出土状況（西から）

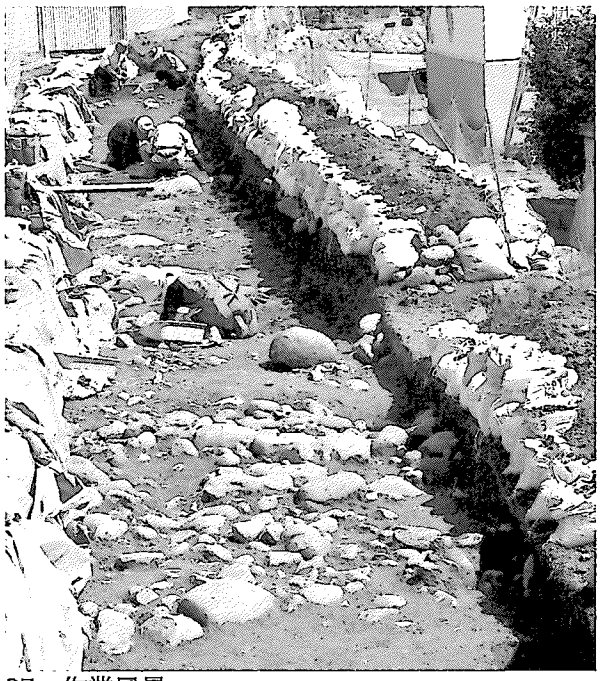
32. 石臼と加工礫出土状況（西壁断面）

33. 石造物片（右上）と加工礫出土状況（北から）

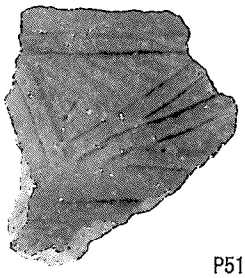

34. 石造物片と加工礫出土状況（西壁断面）

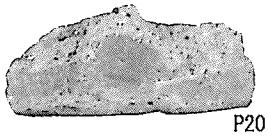

35. 石造物片と砥石出土状況（西壁断面）

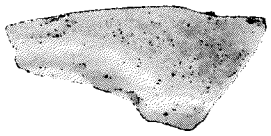

36. 測量風景

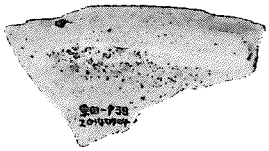

37. 作業風景

38. 作業風景

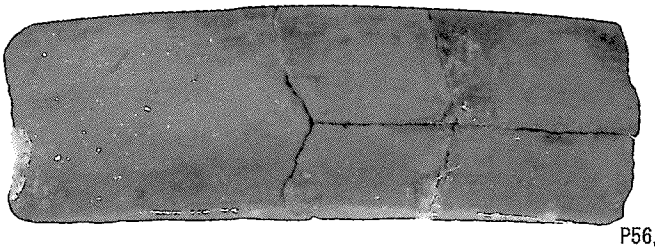

P51


P20

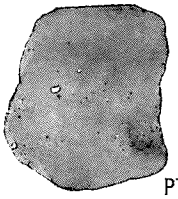


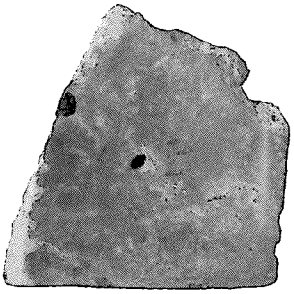

P38

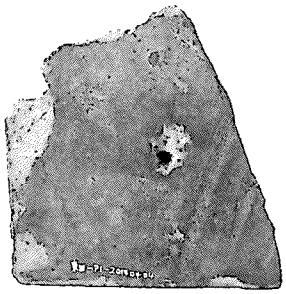
P45

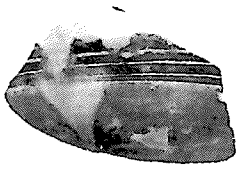

P56, 8

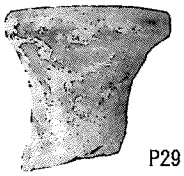
P66


P72

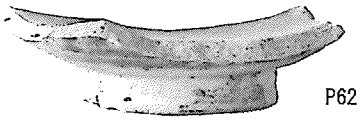



P1


P12

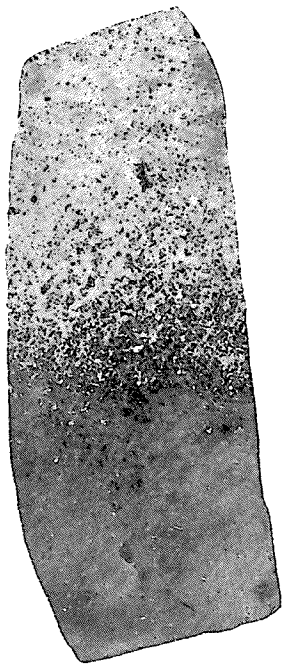

P29

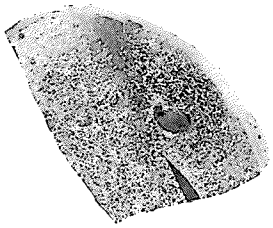
P25

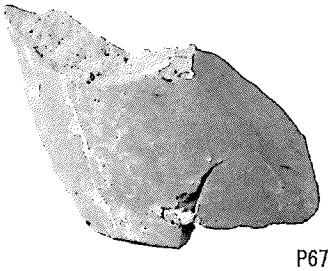

P62

P46

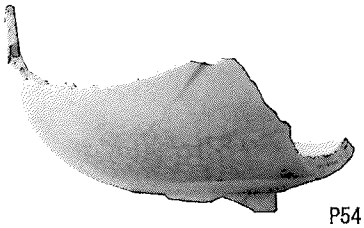
P52

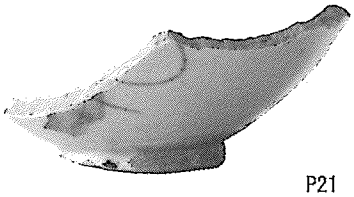

P27



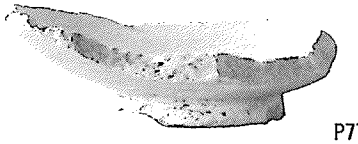

P67

P55

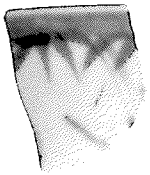

P54

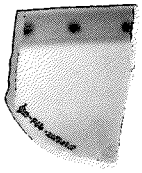

P21

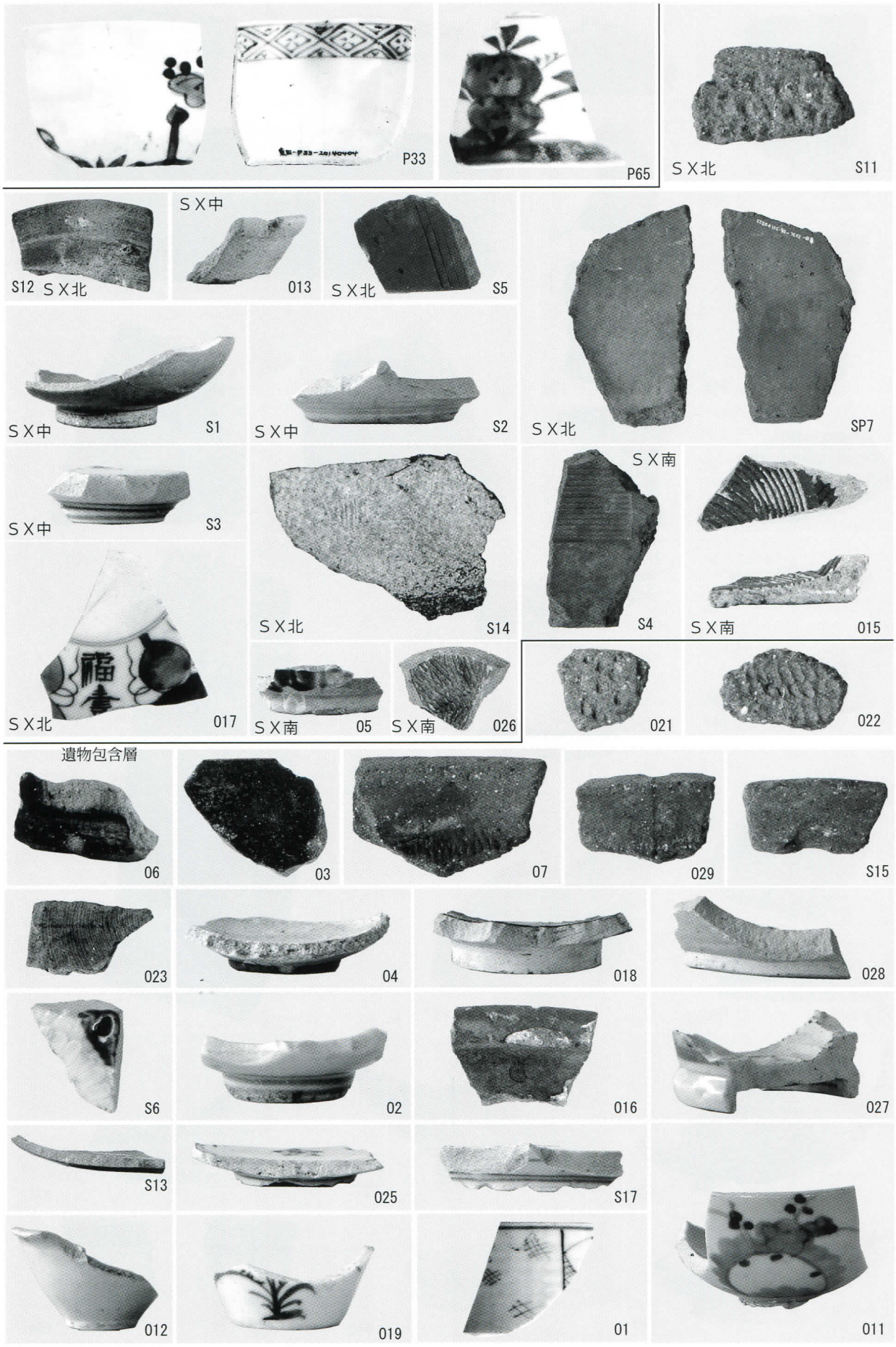
P74

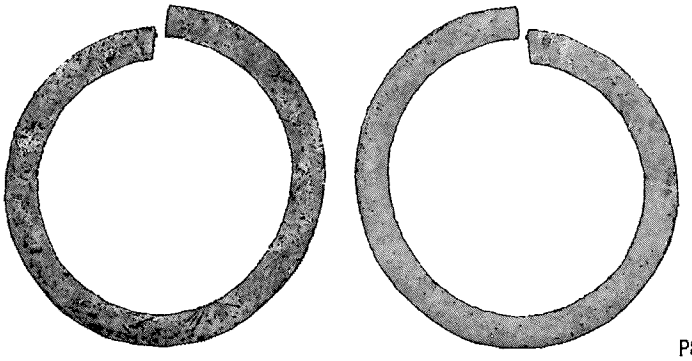

P77

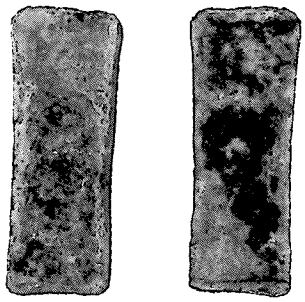
P32



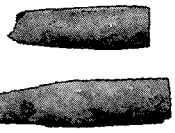

P64


P33
P65
ＳＸ北
S11
S12 ＳＸ北
ＳＸ中
013
ＳＸ北
S5
ＳＸ中
S1
ＳＸ中
S2
ＳＸ北
SP7
ＳＸ中
S3
ＳＸ北
S14
ＳＸ南
S4
ＳＸ南
015
ＳＸ北
017
ＳＸ南
05
ＳＸ南
026
021
022
遺物包含層
06
03
07
029
S15
023
04
018
028
S6
02
016
027
S13
025
S17
012
019
01
011

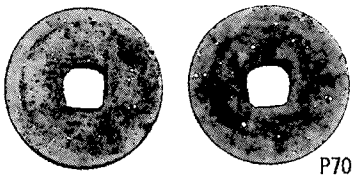

P8

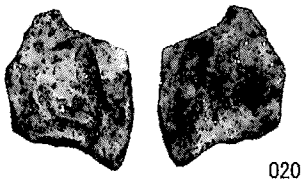

S10

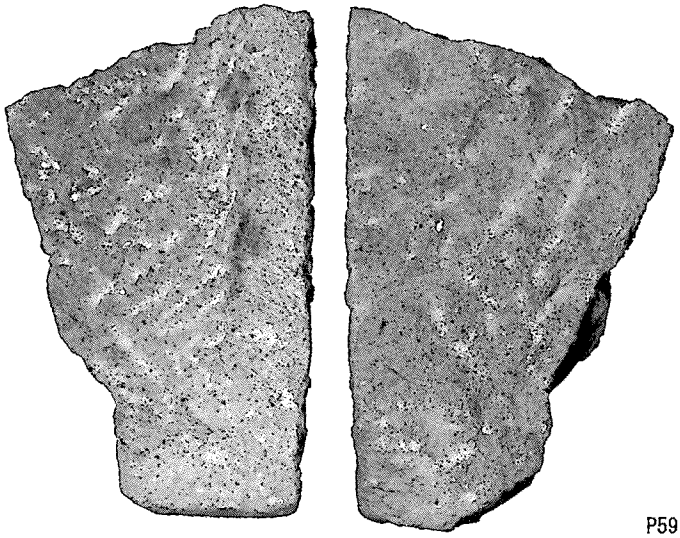
P53


P12
P13

S9


P70

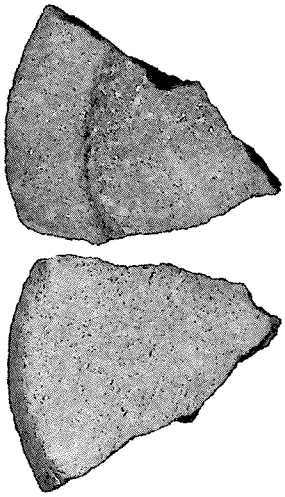

020

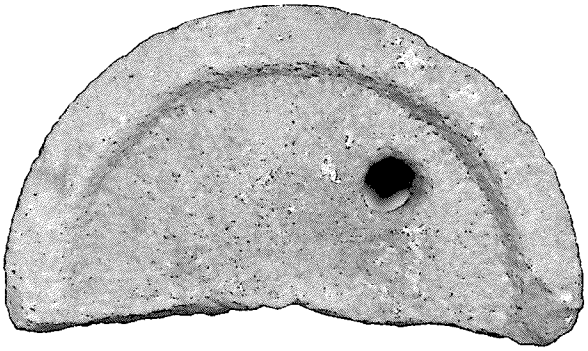

P59

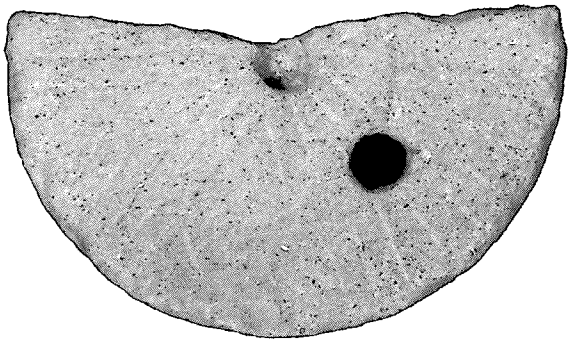
P59

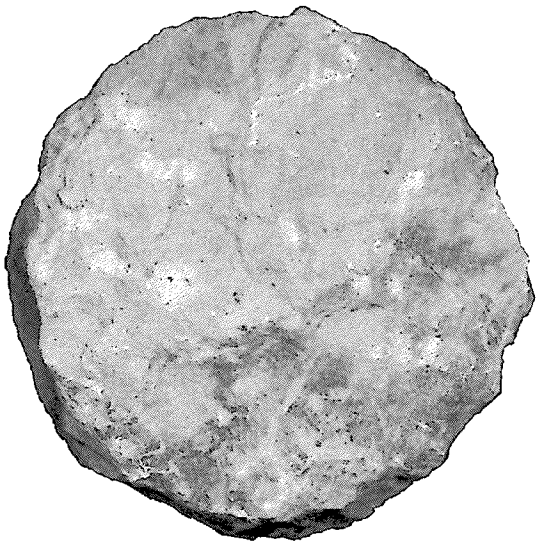
P50

P73

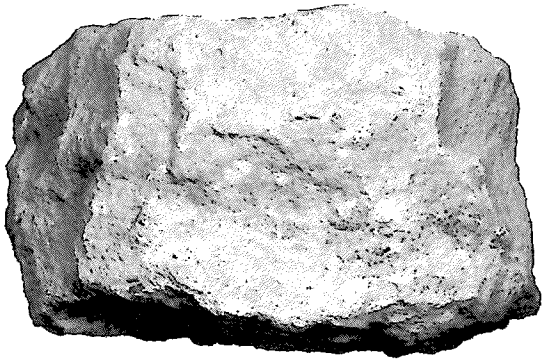

P75

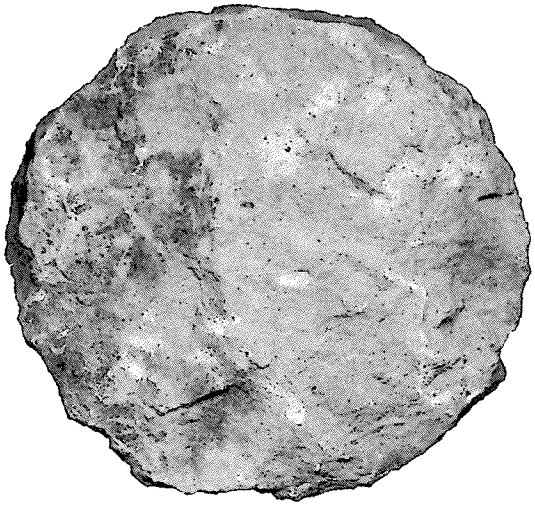






P76





報告書抄録

ふりがな	ひがしだいせき
書　名	東田遺跡
副書名	―畑地帯総合整備事業岩手地区農道５号整備に伴う発掘調査報告書―
編著者名	雨宮弘聡（山梨市教育委員会）／小谷亮二（昭和測量株式会社）
編集機関	山梨県峡東農務事務所／山梨市教育委員会／昭和測量株式会社
所在地	〒404-8601　山梨県甲州市塩山上塩後 1239-1　☎ 0553(20)2708 〒405-0006　山梨県山梨市小原西 843　☎ 0553(20)1487 〒400-0032　山梨県甲府市中央三丁目 11-27　☎ 055(235)4448
発行年月日	西暦 2014（平成 26）年６月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひがしだいせき 東　田　遺　跡	やまなしけん 山梨県 やまなしし 山梨市 ひがし 東 647-2 ほか	19205	05033	35° 42′ 41″	138° 41′ 53″	2014.03.19 ～ 2014.04.18	100	畑地帯総合整備事業岩手地区農道５号整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東田遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器片 （中期、後期）	流入であるが縄文土器片、平安期と思われる土師器片が出土した。 石臼、すり鉢、砥石といった石製品とほぼ同じ地点で未成品と思われる石加工品が２点出土した。
	散布地	平安時代		土師器片	
	社寺跡	その他の遺物 （近世、近世以降）		陶磁器片 煙管 銭 石臼 すり鉢 砥石 石製加工品 青銅製装飾品	

山梨市文化財調査報告書　第21集

東田遺跡

―畑地帯総合整備事業岩手地区農道5号整備に伴う発掘調査報告書―

発　行　日　平成26年6月30日
編　　集　昭和測量株式会社
　　〒400-0032　山梨県甲府市中央3-11-27　℡ 055-235-4448
発　　行　山梨県峡東農務事務所
　　山梨市教育委員会
　　昭和測量株式会社
印刷・製本　株式会社　内田印刷所
　　〒400-0032　山梨県甲府市中央2-10-18　℡ 055-233-0188